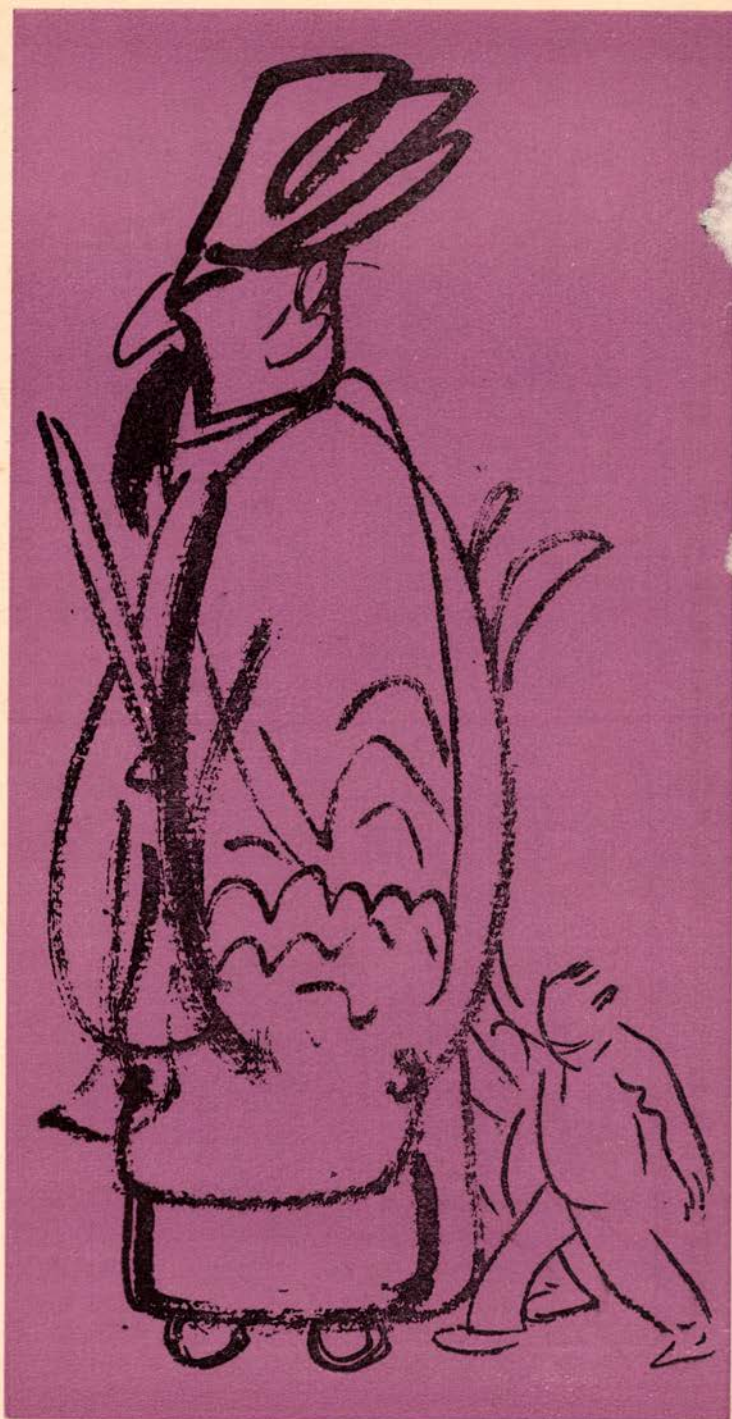


王 野 麻 生 路 郎

川柳新誌

十二月號





近作柳樽

路

郎

選

鳥籠へ雀取柄もなく生れ金がない丈の相違と思つてゐる鼻高く高く神經質なりき天井のしみが氣になる宿につき笑つた云つて娘はもう言はず泣いてゐる布團の裾に風が入り自殺した後の姿も考へて死ぬるのもいそがしいなあ瓜を切らうか朝の生活には廣い窓がある第よ父よ貧の中にある何もかも似合ふて未亡人瘦せる車窓から笑へば笑ろてゐて呉れる冬云ふ日を老の身の夢そぞろ忘れたことのなつかしいこゝ山にそむいて家は冷たき冷たい手そんな心か云はれてるエゴイストかなはねばもう死ぬる氣の

同 大 同 同 同 同 同 同 神 同 同 同 同 同 同 大

阪

戶

阪

同多同同同同同同鑣同同同同同同同同大
喜女月歲子



さびしさはお茶一杯で去んだ事
折々は長女に云ふ名重すぎて

葭乃さまに（三句）

逢ひたさは戸籍しらべを讀んでから
酔ひざめへ水もつてくる足白し
病めばこそ働くことの嬉しくて
ふところへ手をあてゝ見る程の金
商用で抜ける新地のさんざめき
デヤンケンホイアイコで柿の大さ小
額づけば風の音さへ尊くて
誰へともなく感謝して白い飯
上京の母草臥れる事ばかり
手でものが言へる嬉しい啞者二人
からかはれたい氣の娘窓を明け
三十を過ぎて口臘脂チト目立ち
帶の巾娘チト氣が張り過ぎる
又死んだ話患者へ聞かされぬ
夕暮の魚屋捨てる氣でまける
片言を皆んな笑へば笑ふなり
ペーチカを焚いて夜遊び遠ざかり
古本屋云ひ値に買へば惜しくなり
鍵裂きを見付けて母は連れて去に
末の子はついでに出来たこにされ

同大同同同滿同同同同同同同同同同同同同同同同

阪

州

同聚同同同同草同同同同伴同同同同同白同同 同同

峯

明

内

蝶



運向けば帯も錦紗も安いこと
 叱られてゐてもこまめな丁稚なり
 黒白を争ふ程でなかりしに
 ふさ我にかへれば秋のみ深くして
 炭坑は止んで三三の秋のさび
 末つ子は貴公子のする戀をする
 生活をそのまゝ顔へもつて来る
 絹衣具に馴れた身に銀行休む也
 藝術を持たぬ空虚な眼じやないか
 かまきりの戀の激烈さを思へ
 淋しさが道化役者の身をつつむ
 其胸へきちんさしめる帯の巾
 これだけはぬひあける氣の午前一時
 三尺をしめてほんきにまだ子供
 かんがへて見れば甲斐性が無さすぎる
 儲かるが儲かるまいが丁稚なり
 運轉士話してゐても目が座り
 豆腐屋は後戻りして一つ賣れ
 東西屋唄ひながらに角へより
 課長室今度の妓が藉いたそな
 牡丹刷毛今夜の口説考へる
 ふさ覺めてみて肖像の恐ろしく
 御寮人鯛一匹に出で給ひ

同 同 同 大 同 同 同 松 同 同 同 廣 同 同 同 大 同 同 同 福 同 同 同

三

阪 江 島 阪 岡

同 同 同 其 同 同 同 舟 同 同 同 露 同 同 同 靜 同 同 同 無 同 同 同

象 帆 斗 雲 限



夜店ではちぎ恥かしい櫻紙
母の置く算盤へ子は飯を急き
寝てからも父の算盤聞ゐて來
女房に算盤させて飲んで居る
几帳面過ぎるに愛想盡かされる
變骨がまたも出世を遅らせる
新進の君にさ嫌な仕事なり
來るたびに貯金獎める姉であり
洗はせる子供玩具を持ちかへる
後見の居る間は利子がされてゐる
やるだけの事もやらずに氣を落し
東西屋男盛りが旗を持ち
獨々逸のまたも機先を制せられ
忍耐の額かけし日を忘れしや
飛行機に家の暗さを致へられ
自動車は話のすまぬ儘に着き
結局は泣いて別れし戀なりし
さうだいさ云へば財布を出して見せ
二階借誰はばからず琵琶を弾き
障子張る傍で子供は寒う寝る
小謠は發車と共に又始め
新らしい間庖丁袖がられ
父親が鏡を出すさ髯を剃り

同 同 同 同 大 同 同 松 同 同 石 同 同 同 神 同 同 同 大 同 同 同 石

阪 江 川 戸 阪 川

同よし江 同同柳子 同同清宵 同同茶撫朗 同同同水火 同同同ささ舟 同同同水聲



先生も近頃十姉飼始め
産むまでは産婆を神のよに思ひ
斷髮に袖を曳かれてギョツとする
十姉妹裏の隅まで行渡り
すき焼の氣分になれぬ居候
女の子くすりの瓶に花をさし
果物屋自分の足を見て通り
神前のおんな若さで禿けて居る
ウエータの沈んだ顔へ吹きつものり
自動車の搖られ心地も東山
次ぎぐに産んで衣裳の持ち腐り
ひやかせぎ外に女のない如く
そんなものだとは若く見られてる
譯のあるこども知らずに世話をやき
こしらへたように友達死んでゐる
もらひ水して來て植木屋一つ賣り
散文的ねなどゝ女の惻巧さう
妾宅に育つて父を父させず
猿廻し太鼓たゞくは苦でもなく
間にも來いさきれいな金をくれ
昇給の辭令また來年かと思ひ
洋装の年増哀れな凋び様
不仕合せ末の子までも亡くしてゐる

同 同 同 大 同 同 松 同 同 大 同 同 神 同 同 大 同 同 蟹 同 同 同 同
阪 江 阪 戸 阪 池

琴同同蒼同同町同同美同同志同同毒同同壽同同炭同
人梧樓二鮎郎仙魔車



里歸りした子に母はつきつきり
 家繼いで親の質素に怖くふれ
 我影さ思へず壁のやゝ寒し
 目に泌みる様な小さな花を見る
 開業のその時だけに顔を出し
 教會を出るまで酒はよす氣なり
 看板の娘煙草をよく切らし
 罐詰を開けて買つてく一人者
 昨日まで咄した人が死んでゐる
 恐しや死んだ患者に親も來ず
 滿腹の自分の動悸聞いてゐる
 足音に母泣かされて來たを知り
 出る月が何時かはなしに母になり
 十五年行方の知れぬ檀家來る
 言譯が上手になつて哀れなり
 教會へ只讚美歌をうたひに來
 歸省してゐるは矢つ張り脚氣なり
 思ふほぎ木版ほれぬ齡になり
 入墨も押しのきかない齡になり
 看護婦の患者忘れた戀もよし
 酔ひどれが續いて通る窓寒し
 心して見れば彼女も媚びて居り
 集金の一寸いや味もいふて見る

同 同 石 同 同 大 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 川 阪 池 梨 阪 池 池 池 池 池 池 池 池 池 池 池 池 池 池 池

同 同 金 同
 鐵 火 火 寒 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 子 路 路 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎
 死



公園に木の葉が散つてゐるばかり責められて出すその藝は知れたもの待つ覺悟紮刺をさけて結ひに來る登山靴今日を勞れた泥のままた泣いて居るのと叱る様に云ひ慰める姉藝者にもおほえあり編物へ來て男の子邪魔がられ死んだ子の憎まれ口をいさしがり新妻を淋しがらせる發明家百萬圓市長おほきくお辭儀をし去るものは追はず溢れ出る若さ握ぎられたその偽りの手の溫み拍手したその手が吸物椀をこり揉めて居る遺産をよそに幼稚園うらみ持つ心は物を云はずなりいやしさを酒の場で又見つけられ奥座敷嫁の生花見て笑ひ玩具店子供勝手に擱んで見こごごと思はず云ふ物語なり親を親と思はず人間怖くなり只一人貯めて家を建て休職の故郷を去つて家を建て十姉妹思つた程に子を産まずおりの中熊は頭を下けるのみよそ行きを着るこ子供は肩を張り落成に近く植木が欲しくなり



糸屑をもんで娘のうれしい日
校長も道徳もなしあゝ電車
早口にさうして居れぬわけを云ひ
ふさこの型の財布だらけで摸掬さ知れ
阪妻の型で夜遊び戻つて來
月の出へ末は夫婦が慰める
食ふ事に勞れた母へ灯がこもり
兄さんの部屋に洋畫ミチュールIPP
寂光院繪まきかゝせる様に出來
人民の金でタイルも張つて見せ
水棚も賣つて三月を夢にする
智恵のない方へ神様向き直り
すき焼と定めて續ける針仕事
アルバムに嫁の寫眞の多い事
貧しさも木綿蒲團にまもられて
孝行はただ眞直ぐに暮すこと
舞妓もう戀を知つてかさからはず
だまされた戀さ知りつゝまだ續け
落籍されてゆく妓の夢が面白し
だしぬいて戻つて膳へ落付かす
雨は上つた三越を outcome 出ませうか
爪切つてやる子へ春の日向ほこ
孝行も出來ず若さを病みつづけ
寒い朝錦魚一匹腹を見せ
叱るではなかつた死ぬる子であれば
藍甕に入るまで糸は白でした
さんな夢見たのか乳房嚙んで泣き
鼻目鏡落してまでも笑ひこけ

同盤同兼同松同豐同松同同同大同尼同同同大同大同島同大同兵
ヶ二ヶ
池浦江中江阪崎阪阪根阪庫

同玉同赤同穗同石同喋同青同夢同吟同雅同一同白同綠同無同陽
司 之 二
政 門 波 竹 朗 朗 路 女 幽 徹 帆 助 骨 春



貸ボートひとめ強く漕いで見せ
 廣告へ破産するさは書いてなく
 一應はびつくりもする案山子にて
 出動を教へるよう灰が落ち
 二人連れチト公園が廣過ぎる
 泊れぬ内に小鳥がたんき居り
 賽銭のたしかに落ちた音をたて
 そろばんの動きもなぶし雨の晩
 望遠鏡で見たよな戀でありまし
 諦めて居るのに見せて又泣かし
 宿命を嘆く其の日の灯がこもり
 鏝鏤さして老夫婦渡り初め
 待ちほけた顔して爪の垢をさり
 救世軍女になるとあはれなり
 又の日に語りながらに汽車を待ち
 魚の群に近江の話さぎれたる
 雨垂れが輪をば描いて落ちて来る
 一票を入れるも戀人落ちてる事
 三十になつても戀人落ちてる事
 生活苦味はひ抜いたしはがみ
 満月に國の踊りをなつかし
 齒を病んで世間をみんなつれなく
 年頃がぬかのくすれに迄笑ひ
 轉寢のまゝ明けて居る一人者
 見送られ今更母の老いた事
 一人者五本の爪へ垢をため
 私ハブルジョアです高級車
 醫大から見れば働く人通
 男の子蜻蛉もつれず飯をせき

同 同 大 同 同 神 横 石 大 石 和 石 甲 大 戸 石 大 別 大 兵 大 大 紀 大 兵 大 豊 大 大 界
 歌

阪 阪 橋 阪 庫 伊 阪 阪 庫 阪 府 川 畑 阪 府 川 山 川 阪 川 濱 戸 阪 阪

光 哉 同 吟 同 三 歌 幸 九 郊 夢 惣 柳 無 富 愛 與 香 北 童 苦 珍 二 盧 玉 香 白 緑 蚊 太
 注 路 射 郎 水 行 仙 白 竹 郎 作 翁 子 星 夫 波 雄 心 髪 々 樓 人 村 柳 泉 吟 哉
 新 太



不朽洞雜筆

麻生路郎

○ 火見櫓にあがつて見るミ、川柳の煙りがあちこちで立ちのぼつてゐる。聲を噓らして叫んで来た川柳の社會化が、ほろ／＼實現されて来たことを思ふミ、微笑せずにはゐられない。が、同時に誤つた川柳觀もひろがつてゐるミが、立ちのぼる煙りの色によつてうなづかれる。

從來誤つた川柳觀を持つ人々のために私達が、されば苦しんで来たかは想像外であるのに、更にそれ以上、第二の誤つた川柳觀を持つ人々が殖ゐるやうではたまらない。此の際特に私達はさうした

人々に對しても監視の眼を怠らないやうにしなければならぬ。

○ 九月號にかいた柳樽評釋の「朝めしを母の後ろへ喰ひに出る」の句解に就て、十月號で、安川久流美氏が「花嫁か息子か」と題して、花嫁説殊に里歸りの花嫁説は、あまりに考へすぎでゐる。しかも、それは現代式の解釋すぎる、古句はそんなに深く考へてゐないものが多いのであるとして、矢張り息子の朝歸り説を正當とされてゐるやうである。次で十一月號で西原柳雨氏が、「一讀即感」の中で久流美氏の朝歸り説に賛成されて、路郎氏の里歸りの花嫁といふ御説は朝飯の朝といふ文字を無視した解かと思ふ。又婚禮の翌朝の花嫁といふ説も聞いたが姑の事を母といつた用例を知らぬと述べてゐられる。

右兩氏の御示教を一讀して見たが、何故あの句が朝歸りの句であるかといふこ

10
ミについては觸れてゐられないやうに思ふ。あつたものに對してはもう少し適確に、朝歸りでなければならぬといふ説がうけたまはりたい。あの句が朝歸りの句であるといふ説は、私も廿餘年の昔から川柳に携はつてゐるのであるから知らぬ筈はない。柳書の二三冊も讀めば、この句の解の朝歸り説を知ることが出来るからである。それを僕が敢て、それ等の説に對して翼踏的な句解を施さずして何故花嫁の里歸り説を發表したかといふことについては一考を煩はしたい。

私が「柳樽評釋廿四篇まで」をかき出したのは主として初心者に川柳の如何なるものであるかを知らしめたいといふ希望以外に、從來の句解が、作家以外の人達によつて書かれてゐるために、句の藝術的價值を紹介するといふこと、やゝもすれば縁遠いものになり勝ちであるから、その點を多少補つて見たかと思つたからである。だから前者が發表した解

釋に準據するといふことを外にして、その句を擬視て、句そのものが持つ、持ち味を出来るだけ、纖細に紹介したいと思つたからである。従来の評釋書の多くは俳人又は考證家、その他の人々によつて句釋刊行されてゐるために、風俗資料がいふやうな方面から見れば相當價値があることは認められても、所謂川柳を作らうといふ人々の參考書としては何んもなく隔靴搔痒の感があるのである。從來の評釋書を見れば徒らに先人の解をそのまゝ襲ふてゐるがために甲の評釋書で誤解である場合、乙の評釋書も又同様の誤解に陥入つてゐるといふ、私達から見れば甚だ遺憾な點が多い。だから私は創作家の立場から、先人の解以外に私の解をさし／＼發表することにしたのである。尤も私の解が絶対に正解であることは云はない。私の解にしても誤つてゐることを知つた場合には今後機會あるごとに訂正して行かうと思つてゐるのであるから、

久流美氏や柳雨氏のやうにさし／＼指摘して高教を仰ぎたいと思ふのであるが、同時に心理的解剖等による根據ある説をうかがひたいのである。

私は先人の間違つた解釋をしてゐる場合に同じやうに間違つた解釋を後人の手に渡すことを羞づるのである。でなければ私は、ものを書く必要がない。先人の書を、紹介さへしておけばそれで充分であると思ふ者である。

私達の尤もおそれなければならぬのは古句の多くはさう深く考へた句ではない。いさ簡單に片附けてしまふものが多いのである。又、古句はこの位な程度に解釋するのが至當だ、間違ひが少いといふやうなことを考へずに、この句はさうした點に、價値があるのであらうかといふことを深く探るべきであらうと思ふ。

要するに古句には何人も動かし得ざる句意をもつもの、句意の解釋如何によつては生きた句ともなれば死んだ句ともな

る句がある事を知らなければならぬ。それは、その句が、その時代の一事象を描出したものであらうとも、その句の持つ内容が時代の異にしてなほ内容的に生命を持つ場合には、その句は永久的に價値ある句であるといふはなければならないと思ふ。

私は古句を讀んで單にその時代に憧憬を持つだけでは満足し得られないのである。今昔は社會組織なり、風俗人情なりが全然異なつてゐる場合でも、なほかつ私達の肺腑をうつころのものがあつたことを思ふ時、古句を現代的に解釋することに何ん等非難を見出し得ないと思ふものである。私が十一月號の柳樽評釋に於て句解した

此部屋に一人寝ますと氣をもませの句の如きでも、山椒氏の『柳樽評釋』には『満更でない中の女が、男に對する思はせぶり』であるを解釋されてあるが私は、若後家の心境を詠んだものとして

句解を施しておいた。これは單にその一例にすぎない。が、斯うして私は私の句解を發表してゆきたいと思ふのである。例にあけた武笠氏は尤も忠實なる柳樹の研究家であるから、こうした一つや二つの誤解に近いものがあつたからさて、決して鼎の輕重をこはれる筈もないから、非禮の點は容されたい。

私が、この一文を草した主因は私の説を固持するためではなくて、右に述べたやうに、先人が誤つた解説を後人へそのまゝ譲渡することをおそれるからに外ならぬのである。

○ 各地で川柳會が盛んになつて來たが、お祭騒ぎや、遊び本位の川柳會が幾ら殖いても、川柳そのものの本質は決してよくならない。句會以外にもつゝ研究會を盛んにしたいものである。云へば川柳研究は、古くから行はれてゐるではないか、といふ人々があるかも知れないが、それ

は主として考證的な古句研究であり、しかも一部の人の研究に過ぎないのである。私の希望するものは、各作家が、形式的に、思想的に、作句本位の研究會をゆびさすものである。作家は黙つて作つてさへゐればよいんだといふやうな迷論を吐く人々が、研究のリーダーをしなければならぬ中堅作家の中にさへ相當あるのであるから、川柳の質の上の向上が遅々として進歩しないのも無理からぬのである。徒らなお祭騒ぎから目覺めなければ川柳は遂に川柳家のものにならないであらう。

墓 参

同行二人

○ 急拵への箒で其の邊を掃き清め墓石を洗ひ機を立て、線香束に火を點するに芳

香四邊に薫じて白煙高く天に昇る。茲は神戸市東端春日野墓地、墓標疊々、秋晴れの下に横はるさころ、燒場への急坂の中途、左側一坪餘りに東に面して「藤村青明之墓」を讀まれる。石碑の背面には「鑛岳青明信士」「大正四年八月二日亡今から十三年前に當る。小鳥が啼き乍ら飛んで行く、神戸市街に離れ一帯を見晴し大阪灣を距て、紀泉の山々を見る。眺望は非常によい。青明の墓をまつ見詰てゐる其處へ故人が現はれ出さうな氣がしてくる。死ぬ前日、僕は川柳が漸く判つて來た様な氣がするを云つたさうだ。何う判つたのか、葬儀當日の光景、まだ自動車が見えなかつた事、大朝大毎の夕刊發行當初であつたこと、「秋晴れの橋で一正釣り上げる」故人の代表句ではないが秋になると思ひ出すといふこと、眞つ黒けのけいといふ流行唄がはやつてゐること等、煙草を喫つては咄し、咄しては

喫ひ、何時までも話が盡きない。布引山に陽が入つて、眼下の町に灯が點き始めた。焼場の煙は益々濃く山を包んだ(紋太)

○句 佃 嶺月

死んだのは夏だったな墓に云ひ
青明を慕ふ心地に手を合せ
戒名の字の讀めぬまゝ控へまき

(昭和二年十月)

久流美君へ一言

森 田 一 二

今日届いた川柳雑誌十一月號を見るに
久流美君が『森の家君の句境』にして僕の
創作に短評を加へてゐる。處で、君の
批評はまるで見當違ひだ。先づ第一に君
には階級意識がない。尠くしも、今日組
織的にソシアリズムの一頁でも覗いた人
には、あつた批評は出来ない筈だ。尤
も君の過去現在に就て餘りに知り過ぎて
ゐる僕が、いま君にソシアリズムを云々
するのは野暮の骨頂である。たゞ僕の恐
れることは、他の階級意識をもたない人

々によつて久流美君と同じ見方をされ
ては困る云ふことである。で、これを
機會に以下一言君に答へるまゝに、僕
の立場を明かにしておきたいと思ふ。

白骨と隣り合つてゐる資本主義

此れは言ふまでもなく、今日崩壊の過
程を辿りつゝある資本主義の末期を曝露
することによつて、未だはつきりした
階級意識をもたない處の大家を無産階級
のうちに戦ひ取るべくアツピールしたも
のである。然るに君の曰く、

成金よ汝も地下に眠る人

云ふ君自身の句を引例して、僕も同
じ出發點の句だ云つてゐる。此れは
迷惑である。第一、『成金』と『資本主
義』とは、てんで内容が違ふ。資本主
義とは云ふまでもなく、國際的には帝國
主義にまで展開するものである。もつこ
通俗的に言へば餘剩價値の獨占によつて
被支配階級を搾取する云ふことである
然るに成金云ふのは何ら積極的な意義

をもつてゐない。勿論、彼らは支配階級
的意識さへも持つてゐない。たゞ偶然な
機運から富を拾得(さうだ、特にさう云
ひたい)することが出来た一市井人にし
か通じない意味である。それを地下に眠
る——運命的に對立させたのミ、資本
主義を科學的に死に直面させたのミは同
日に論すべきものではない、そして『
此の句は現在の時世を批評したものか何
うか疑はしい』云ふ君の言葉は、君が
今日プロレタリアの一人であるにも拘ら
ず、その階級として意識を把握してゐな
いことの曝露である。

氣をつけてゐるご蹴られるビール樽
に對して『——此のビール樽を蹴つて
見たいのが瘦せた森田君だらう。呵々』
君が如何に現在の境遇に就て無關心であ
るか云ふことは、慙うした滑稽さして
の批評しか書き得ないことに徴しても明
かである。これは君の爲に悲しむもので
ある。

鳴り皮

岩本素人

古い手帳から

ボンチ書になつてブルジョア残される
右の句を『——大臣残される』と直して君は頂戴したと云つてゐる。戯談ぢやない。大臣はブルジョア——僕は此處でもまた先の資本主義と成金の説明と同じいこゝを繰返さなければならぬ。僕の句は今日の支配階級の末路を明日の社會に於て諷刺したものである。そしてボンチ書はグラ／＼笑ふものではなく苦い／＼ものである。

以上、僕の創作に對して物を言ひかけて呉れる友情は感謝するが、現在の僕にはもう所謂川柳を弄ぶことは出来ないことを知つて呉れるならば、今些し吾々の川柳は何んなものであるかに注意して欲しい。今日の君は十分に時間をもつてゐる筈の君である。もつと君自身の生活基礎に就て深く考へて見ることを望むその時こそ、僕の創作ははじめて君のものとたり得ると思ふ。以上一言君に呈する所以である。

古いと言つても二年程以前に書いたものであるらしい。今讀み返して見るに少し斗り氣恥しくはあるが、大體の考へ方は今でもさう變つて居ないが、又其當時の心持ちも出てゐると思ふから、一字も訂正せずに發表する事にした。聊かならずききな所はあるがそこは鳴り皮だ。我慢して讀んではしい
昭和二十一年十一月十一日

○藝術は永遠だと言ふ人があるが此世に永遠なるものは一つも無い。皆亡びる、皆死ぬる。地球が冷却に向つて全速力で走つてゐる。地球が冷却すれば地上のものも皆滅亡する。宇宙もやがて……言つた所で何億……兆萬……年の後かは知らないが、消へてなくなるであらう。イヤ、キツト無くなる。

それでもまだ藝術家が残るにでも言ふのか？ 第一藝術なき言ふものは初めから無いんだ。それは言葉の上の概念である

藝術なんて言葉を誰が「たい發明したのか知らないが、こんな幽霊見た様なものゝ爲にいかにも多くの人を不幸に陥入れた事だ。だから悪い事は言はない。藝術ミか言ふふたいの知れないつきものを振り落して、藝術家の假面を脱ぎ、裸一貫の人間になつて出直す事だ。そうでないミ本當に眼が覺めない。眼を覺して冷靜に考へるミ、今迄藝術ミいふゴム風船見た様な馬鹿氣たものを大切に仕舞つて置いた事が氣はづかしくなつて来る。人間ミ言ふ奴、何でも自分の仕事にもつたいを付けたがる病癖がある。自己の仕事尊重する結果それに箔を付けたがるのは無理からぬ事ではあるが、其箔愈の爲に知らず識らず本當にものを觀る目を盲くしてゐるのに氣付かないのは困りものである。

○お前は書を描いたのか。俺は下駄を作つたのだ。お前は書かきで俺は下駄屋だ只それだけの事ではないか。だが、お前

の畫は藝術で俺の下駄は下級工業品言ひたいのだらう。

俺の下駄は金一圓也に賣れるがお前の畫は絹代にもならないとすれば、お前は畫を描いた爲に二圓の絹を一圓にも成らない事にした。だからお前の勢力は結局一圓を空費した事になるが、俺の方は三十錢の木材を一圓の下駄に仕上げたから七十錢の生産を得た事となる。するに貨幣價值からすれば俺の仕事はお前の仕事より一圓七十錢也の高價なる譯だからお金にすれば俺の方が隨に勝利だ。しかし俺は何も貨幣に依つても、本質的價值を定め様と言ふのではない。お前は屹度言ふであらう。藝術的價值！

そこだ。それがいけないのだ。だから頭が悪いと言ふのだ。前にも言つた通り藝術と言ふのは概念に過ぎないのだ。實質的内容を有たぬものなんだ。

藝術さいふ言葉が斯くの如く空虚なもの

であるならば、其れに依る價值の認識は不可能ではないか。

人間の仕事は大臣であらうと、詩人であらうと乃至車夫であらうと、何をやつても、本質的に價值は相等しいのである。豈圖らんや藝術的價值と稱する如き特別の度量器はあるものでない。

○仕事の價值は其結果に於て定まるものではなく、其れが作り成される作家の態度に依つて價值付けられるものであらねばならぬ。だから此の價值たるや普遍的のものであり得ぬ場合のあるものも亦止むを得ぬ事である。

我々は出来上つた作品に接した時、其作者の態度が眞剣であり眞面目であり素直である時其仕事から言ひ知れぬ悦びと感銘を享ける事が多い。

併し良き態度より生れた作品は例外なく佳き感じを觀者に送るものとは必ずしも極らない。それは從來一つの出来事、一つの作品に對して世評のまちまちである

事、専門家や批評家の批評でさへ全く正反對の場合の多い事に就て見ても瞭である。

斯ういふ風に考へて來るに自分の仕事から受け取る所の本當の報酬の何かなるものであるか少しづつ解りかけて來る。即ち名譽では無く、物質では更でない。それはたつた一つの自個満足でありはせぬか。自己一人に始終する所の、小さい範圍の、しかしながら深さに於て計り知れぬ法悦であるまいか。

だから若しも一人でも自分の仕事に同情者が表れ、一人でも知己を得る事が出来たならば、思ひも掛けぬ全く計算外の幸福である。嬉しい、飛び上る程嬉しい。嬉しいがしかし、此の計算外の幸福を目的としての製作は謹まなくてはならない百年の後に知己を待つと言はれてゐるがこれも本道ではない。たゞ百年の後にしろ、知己の爲に爲る仕事は邪道では無からうか。

落葉

安川久流美

私は大乗寺坂から今赤い、赤い柿の葉を二枚拾つて來ました。晩秋の匂ひがします。血のやうに燃れてゐるその掌太の美しさに見惚れてゐるゝ、又古い記憶がよび起されます、それは父さしよに日光へ遊んだ二タ昔前の事です。

日光見ずば結構といふ勿れさういふ、贅澤な人のみが押しよせる世界的に誇る公園へ私の行つたのは矢張り晩秋であつた。華嚴へは足を向けなかつたが、割合近い、裏見の瀧へ俤で走つた、そこら見物して疲れた足を宿に着いた時、銀杏の黄葉や、紅葉を鳥目と換へて來た。今考へて見るに成程贅澤な名勝地だけはあつた。晩秋の落葉が、おあしになるのであるから妙である。

落葉が薪木でなしの錢になるさういふことは何だか日本だけの古美術のやうな氣がしてならない。それを拾つて賣る生活

は世の中の隱遁者だつたかも知れない。確かその美しい葉は袋に包んであつた。

落葉が錢——金になる、何さいふ美しさであらう。土産に買ふた落葉、それは利那の目の裏びである。そして小さきわらべの玩弄でもある。

翌る日赤い、落葉の引き裂かれる迄が落葉の價值である、私はこの赤い、柿紅葉の朽ら葉と視したくない寂しい心である。晩秋の匂ひは遂に私の心の底を這ふて行く。(十月二十八日記)

ライン下り

富士野鞍馬

柳橋さういへばすぐ「切つて放てば矢の如し」さ頭へ來るがこの柳橋は名古屋電鐵の始發停留所、四時二分電車に乗るべく三方から三人集合、先達のイ印寫眞機を携けてゐる、それから一升壘さ毛布さ「君！寫眞やるだらうね」「イヤやらん」「君やるか」「いや知らんチツさ」

三人寄れば何さかいふが、三人寄つて寫眞を撮るこゝが出来んこゝは百年後には笑ひ話になるだらう、そんな不用の物携けてある譯にいかん、見送りの小僧に持たしてかへす、その三人日本式つまり舊式には器用な男だが、ハイカラなこゝは駄目。

矢立持つ男寫眞をけなしして

驛長に今渡の自動車を電話かけさいて貰ひ電車に乗る、車中もう一升壘を三分の一減らす、そして洒落の連發は同乗者に喜ばれる、今渡りに着いたのは黄昏、自動車が遅れたので茶店で松茸の煮物をつまみながら又一升壘を三分の一減らす。

自動車でも猶洒落が續く、だん／＼暗くなる町や村を抜けぬけ時早縣八百津町に着いたのは八時、風呂を浴びて夕食一杯やる、そろ／＼藝者さういふ物の必要を感じ、女中に聞くに藝者は一步旅館へはいれないさういふ野暮なこゝ、イ印曰く「ヨシ來年はキツトはいるやうにしてや

言傳もきいて乗合町を出る
警察が一番怖い田舎町

朝起されて目が覚めるのもうイ印もロ
印も煙草を吹かして、朝飯を手早くす
まし、かしわミ松茸を用意して、その外
になくてならぬ一升壺は三分の一になつ
てゐるので、その町の銘醸家から酒類番
査員たるイ印が名刺一枚で銘酒を徴發し
て愈々木曾川岸へ出る。

船頭は永年イ印の最貧最年長の老船頭
きけば六十三歳で孫のやうな子供がある
さいふ呑氣な爺さん、土地の藝者を二人
たのんで舟に乘込む。此處から下つては
面白くないさいふので、發電所のヒの淵
まで登る、木曾川の最も巾の狭いと感じ
る邊で舟を止めて岩を登り、溪谷植物を
採り栗を拾ひ十一時頃かなソロ／＼下る

御料林三味のせたの下を漕ぎ
岩に響く三味線の別な音

何さか岩何さかの淵 龍宮へさかい
るさいふ石段はなるほど自然の石段が底

の底まで續いてるやうに見る、この淵
に針金が引張つてあつて奥から流す材木
がみなこの針金にさまるやうになつてゐ
る、船頭にきけば今少し上に二間位しか
ない狭いさこがあるさうである。八百津
の發電所は貞奴で名高い福桃氏が一番初
めに建てたものであるさうな、八百津ま
でに瀬がいくつがある、瀬の度に三味線
を濡れそまいと藝者君猫の皮を袂で覆ふ
て来る、それも濡れぬ用意か。

瀬になつて都々逸途切／＼れ也
御婦人に用事があつて岸へつけ

八百津へ戻つて藝者をかへしてイロハ
の三人さなり意氣を新にして舟を出す。

だん／＼所謂ラインになつて来る

抑もこのラインミ云ふのが寫眞の扱へ
ぬ三人に氣に入らぬ、別に外國語を拜借

せずとも何さか云ひ様があつたらうミフ
ンガイする、新緑に遅く紅葉にちみ早い

木曾峽それでも絶景に相違これなく、か
しわミ松茸ミ酒の腹で清元、哥澤、伊那

節、義太夫、觀世、喜多流ミ獨りよがり
をつくして絶景になるさだまつてその景
色を賞し、太田の渡しの鐵橋をくぐる、
この橋三十五萬圓かつたさうな。

鐵橋が見えて失立を取出だし

ライン遊園裏、飛騨川の合流點あたり

から川巾廣まり奇岩連座、外にも舟遊の

一團がある、それまで吾々の外舟にも筏

にも會はず、つまりラインを探る人はこ

の邊から下にあるらしい、此處の岩石は

ざれも薄い層をなして赤間石のやうな色

のが多い、もう三分の一も八百津の銘酒

も残り少い、かしわミ松茸にも歌にも倦

いて、ロ印は船頭の外に首を漕いでゐる

絶景を唄ひ疲れて寝て通り

犬山城が見え出した、明るい氣持にな

つてもう上陸を待つ次第、女學校の修學

旅行の一群制服の少女が川岸に噪いでる

泳ぐさいふモガもないらしい、三時愈々

犬山に上陸犬山城見物は省略して、街に

犬山焼を素見驛へ急ぐ。

急行電車で大山を發車名古屋柳橋に着いたら電燈が點いてゐた。

會て臺灣臺北の新店溪を蕃地から下つたところがある、公平に見て新店溪の方がいい、然し本會決定して悪いところではない、一度は行つて置く所である、伊那節にも本會はよいといふ類詞がある。

(二、一〇、一五列車中)

東奥の佛都 (三)

平泉中尊寺

三井與之助

辨財天堂 の金光明最勝王經曼荼羅十願は、同經を金泥の細字を以て、十界寶塔の形に書き、左右に經意を繪解きたもので、美術的價值に於て當山屈指のものである

寶庫 の一字金輪佛木彫座像は、古來生膚大日と稱され、優美端嚴の面相、然も淡紅色を現したる豊頬、實感的の朱唇等、洵に寫生的女性感は、溫味も感ぜ

らるゝかと思はれる、正に藤原時代を通じて、此種彫刻の傑作にして、中尊寺佛像中の白眉である、寶庫の中には尙木造大日如來を初め、數多の貴重なものが陳列されて居る。

本坊の本尊丈六阿彌陀佛、閻伽堂藥師如來、千手堂十一面觀世音等、國寶にも入るべき逸品が澤山ある。

尙專門をはなれて見物すべきものに藥師堂、大日堂、辨慶堂等、諸堂舊跡、史實に傳説より興味多きもの澤山にある。

域内白山の際に、老杉に圍まれて立派な能樂堂がある、毎年四月一山の衆徒に依つて、演能(喜多流)されるこか、もこは奇古の祭式が行はれたる由、之も往時の名残、佛を偲ぶすがである。

毛越寺

當時は中尊寺をも凌がんに

かりに堂塔並び建つて、梵唄の聲盛なりしあゝ絶つて、今僅に常行法華の二堂を三むるに過ぎない、南大門の斷礎は幾に埋もれ、蘆荻徒らに大泉池畔に茂

り、芭蕉自筆の夏草やつはものごもが夢の跡の句碑淋しく、落葉疎々たる秋、來つて此地を訪はゞ、愁人ならずともまた感慨去る能はざるものがあらう。

中尊寺に名物米餅と稱するものこあり住古清衡以來よりの茶菓云ふ、風味枯淡、東北の人情と風俗を、形と味に徴はせるが如く、何となく、野性的にして然も敦厚なるを思はせる。

附近名所中尊寺山下を流るる、衣川の流五十餘、安倍賴時父子の據れる、衣川の柵址あり、木曾の寢覺の床と併稱せらるゝ五串の溪は西二里、田村鷹將軍に亡ぼされたる、夷酋惡路王の據れる、達谷の窟は一里の地、邊地未だ宣傳乏しく多く知られざるも、東北の耶馬溪の稱ある、貌鼻溪は東四里半、今日は電車ありと聞く、沙鐵川の兩岸數十町の間、石灰層より成る峭壁にして、舟を雇うて流を溯る、偉觀と壯快は、花袋氏の山水行

脚に依つて憶るゝ事久しけれも未だ期を得ない。

平泉は松島より四十一哩、一ノ關の次驛なり、奥州の一の宮、鹽釜神社に詣で金華山の男性的風光、松島の偉觀ミ、併せて政宗の遺したる桃山美術を觀賞するものにせりては、中鶯寺は正に一跨ぎの地なり、のがすべからざる處である。

講演は續いて、松島の瑞巖寺、仙臺大崎八幡寺、桃山時代の遺物、中鶯寺系の阿彌陀堂の磐城白水を経て、解散さるゝ豫定であるが、自分は都合もあり、何れも再遊の地故に、平泉驛にてお別れした

(八月廿五日記)

共鳴と憧憬と

庄 萬よし

一年も前のこと、力好君がみて二枚の短冊を書いて貰つたのは

醫者にでもかれゝ亭主火を起こし竿竹の手親子のやうに落ち

こいふのでした。この晩力好君が身の上話しや柳談の氣焔のうちに「僕は馬行君や刀三君のやうな句を作つて見たい」しみんぐ言はれました。當時馬行刀三兩君が新進氣鋭の作者で

主義あつて花火線香の死を選び
不同調 文藝春秋 二階留守 馬行
戀を知る頃は索種へ話しかけ 刀三
裏切つた女よ人の子を生め 同

な澄冽たる句を發表してゐた頃で、圓熟した力好君の行き方は全然違つてゐた。力好君にしては、こても再び味はない兩君の若さに憧憬を持つたのであらう。

社友の誰れもがかほる君について憧憬を持つてゐる、三笑君などは一生かゝつてもかほる君の銘吟の眞似は出来ないこと述懐してゐる。

花道は相合傘の幅に出來 かほる
灰吹きを洗ふおちよん松盡し 同
坊主持ち親切なのはべめ直し 同
等の句にあらはれた、嶋の内情緒の落着いた教養のある、垢抜けのした味はかほ

る君特有のものであつて、野生の自分等が如何することも出来ない領域である。憧憬とは自分の達し得られない美點に對する憧れであつて千差萬別の個人を繋ぐ鎖である。

慷慨、慷慨と語り、洒落、洒落と笑ひ吾黨の十徹宵痛飲し、策士終日策を講ずるを共鳴こいふ、血をすゝつて生死を奮ひ、水火を辭せざる結束は共鳴の賜である。共鳴は青年の特權であつて柳詠を興したり、改革を斷行したり一刀兩斷の處置は共鳴の產物である。缺點の方から考へるゝ共鳴の奔流は傍道へ流れ易く、偏頗、邪道、頑固なごに陥り易い、憧憬の過ぎたるは特長を失ふて妥協、姑息、軟骨に陥り易いことである。

幸ひにも人心の微妙なる共鳴と憧憬が同じ頭腦のうちに並居して、よく事を始むるに共鳴を以てし、仕事を續けるのに憧憬を以て趣味の寶坑は永久に掘り下けて盡ることはないのである (十九日)



例外佛岳紅佛

— 猫好き 學校好き —

蛭子省 二一

◇川柳縁切寺の著者、澤田例外君は最近された。私は一度も文通した事がない。夫れにアノ著書を半狂堂から求めて、半分も讀まぬ中に、川柳家外の友人に望まれて、もつてゆかれたまゝ再び手に入れもせず過ごしてゐる。君には『末摘花難句註解』がある、これも今書架にない。先般川柳行脚で、夫妻が平凡寺を訪問した折り末摘花回覽研究の古い冊子を見せられた。其の内の一人に例外氏を見た様な氣もする。尤も氏は我樂他宗一個寺の住職でもあつて、奈蘭陀寺と言はれた事もある。後に故あつて脱宗された。

未番で思ひ出すは、私が『獅子頭』誌の一目であつた時に、岐社で例會を開いた。而美子氏其他いづもの顔振れが出席されたので、いたづら氣が起り、岐翁と私が二階へ避けて、課題を工夫した結果、『未番』をやつた。衆皆眼を丸くされたが披露してゐるさ、多くは露骨で古人の脚下にも及ばない。私の作などはテンデものになつてゐない。其苦である、未だ角帽時代の生息子經驗がないから、穿ちがない、爾來、未番句の研究

は避け得らるゝ丈け避けた爲めに、澤田氏の著も手出しもせず今日では聊か後悔氣味である。

青年と老人の川柳家の間に、『末摘花』が悦ばれてゐるのを見受ける。一は性研究流行の餘波であらうし、他は年寄にあり勝ちな傾向趣味で、ごちらも遊戲半分を察せられる。未番の研究は決してそんな不真面目なものではなく、女百人の中で眞樸になつても虚心である底の禪味が體得されねばならぬ。淺黃氣分で未番句を觀察されては、到底江戸文藝の精神は理解されない。バレ句の眞の興趣を知つて、始めて古川柳の一角に活きた解釋がつくのである。澤田氏がトク此の邊に徹底觀を有して居られた事は敬服する。私は『註解』を學友に探して貰ふべく依頼した。暫くして、『末津睦花』五編六編が來た。君の編むところ、少雨莊文庫へ贈られたものが、廻はされたのである。珍藏してゐる。七八編もある由、尙ほ類聚末摘花は完成終らず、約五百枚の原稿が残されて居るさ聞く。

例外の出典は知らぬ。多分は法律からきたのであらう。平素

大猫を愛し、芝時代に五匹の猫がゐた云ふ、これ五猫庵、日本大學出身辯護士、明治十六年生だから四十五、非常に苦學されたさか、爲めに晩年健康を害ひ、大正七年靜岡に引退後、俗務を棄て夫人を迎へられ、保養を兼ね専心川柳方面に没頭された。病弱の爲め他と交渉を求むるの繁を一切さけ、獨り樂しむで居られた。君は會津藩の有名なる國學者、澤田名垂の孫、澤田名垂……五架園又は木隱翁と號す。別號は和氣在躬、通稱は新右衛門、東奥會津の人なり、弘化二年歿す年七十一、和歌體六種辯、古字考、新編會津風土記、日新館童子訓、爲政雜談、家屋雜考、宿直物語等の著あり

血統は争はれず、藏書山積、俳句は連中の選者株、死後の雜記帳の端に、鉛筆でかすかに

猫の子をふんで飛び退くふさんかな

こ讀み得云ふ、アレ丈の川柳研究家に、川柳の作がないのも不思議、何れかに幾何が残つてゐよう、詮索方を學友に委嘱した。發表慾の頗る寡少な人であつたから、人知れぬ研究物があつて、他の學者の企及し得ざる發見がある事は明かである散逸を恐るゝのみ、山崎今朝彌氏著『辯護士大安賣』に君の逸話載せらる。彼の出齒龜事件、唯一の辯護士として世人への印象は一層深からう。

行脚の歸途、學友三井君と茅ヶ崎の『いもづる』社を叩き、相携へて五猫庵を慰めむか話が出たが、君も多病、私は病後遂に果さなかつたのは、夫れ丈の縁であらう。

◆『柳の葉末』を謄寫版にして、頒かれた砂山岳紅氏は、私が

行脚で東京在留中の六月六日に永眠された。私も旅宿に病んでゐた爲め葬儀にも列し得ず申譯なく思つてゐる。曾て學友に私が上京迄に、東京市編纂の『東京の史蹟』を求めて置いて貰い度いざ依頼した處から、岳紅君の書架にそれがあつて、話が出たのであらう、見ず知らずの私に、是非贈つて呉れろとあつて其の厚意を悦んでうけた。ケースに「ハー」ミベンで書いてある。これが君の遺された文字が常に見るのである。君はスタイル博士の歸途を金港埠頭に送つてより、風邪に罹り遂に立たず、私にアノ書を贈られた際は最早餘命の程も覺悟して居られたらしい。一切面會謝絶であつた。淺草産の純江戸ツ子、軟派研究家にして、世界のルーデサツク蒐集云ふ妙な道樂の外に、土俗品には尊いものが多く、賣立もあつた。

君の『柳の葉末』を、今度少雨莊文庫から朝鮮迄持ち歸つて私が青年時代に筆寫したものと對比して、ごちらが間違つて居るのか判明せぬが、アノ謄寫版(訂正表附)ものは、未だ不完全ではある、只その熱心に至つては川柳家が恥ぢて教はられねばならぬ。

學校通ひが好きだから、『岳紅』云ふ。明治二十二年生れ電力會社の技師であつた。

◆私は九月半から痼疾喘息に苦しむ、布團にもたれて讀書執筆十月二十日より容態激變危なれしが、茲に再び布團に倚つて、此の追悼文を草し、暇目久しふして二靈ミ膝を交ゆるを覺ゆる。合掌。

川柳
漫畫

累卵の遊び

(八)

路 郎 評

紫 舟 畫

おい君といはれて見れば帯ながし 春 三

失戀か、知らず。失意か、知らず。遅々として歩み、茫然として



立ち止まる。顔色蒼白、瘦弱憔悴。帯の悲しみ知るよしもなし。

二二

どうぞお取り下さいといふ寒い店 豆 蔓

ポスト寂しく立ち、北風ふきすすぶ。店こいふも名ばかり。
草鞋寒く、駄菓子寒し。にま／＼顧客あれども



『どうぞお取り下さい』

こいふて更に動かんこもせず。あゝ、枯木に似たる餘生なるかな。

尺持つて思案は暮し向きのこと

光路

一に一足せば二也。然り二に二を足せば四三ならん。然り三雖
臺所の算盤ばかりは常に一に一足して二にならず、二に二を足



三

ぼろろ

して四三ならざる也。眞理ニ實際ニは往々一致せず、尺を片手に煩悶する所以也。

徒らな鉄なりけり蟹煮られ

町二

蟹の煮らるゝや再び海を見ず。極樂か、はた地獄か。

「徒らな

鉄なりけ

り」を観

するも人

間のエゴ

イズムに

外ならざ

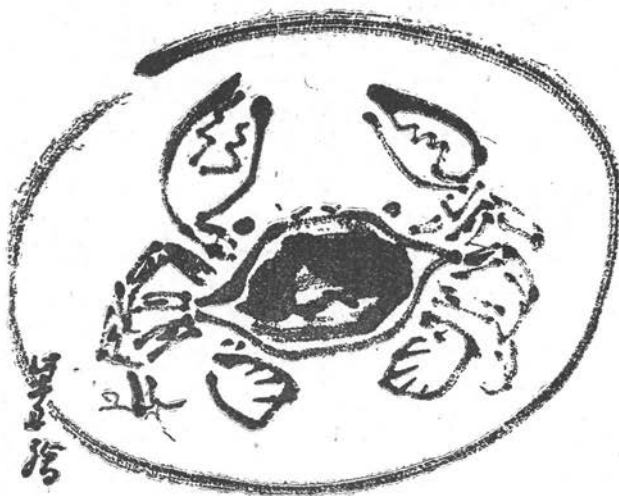
るべし。

労働者ニ

資本家の

間にも、

かゝる悲劇常に繰返さる。亦悲しからずや。(完)



ぼろろ

募

集

句

類句小言

「色街」の句を選して

塚崎松郎

色街

色街へ平氣ではいる年になり
 色街へ来て新妻をふみ思ひ
 色街で小僧半助掘らされ
 廓てう字を知つてゐてはやさ
 暗い街折れてこゝから廓なり
 色街の灯がほんやりさ雨の晩
 色街で通を振まくあさまし
 色街で丁稚車がてれるなり
 色街の交番所はしかくばり
 色街を出てカフエの賑やかさ
 色街だけの若旦那にてなさけ
 色街の背を賑はす流行唄
 色街に近く子供がまてゐる
 色街に住んで横綱よく似合ひ
 中座から歸つてからの一さわぎ
 色街の角の焼芋よく賣れて
 都合よく色街へ来て雨なり
 色街の櫻へまわる女連
 三階の眞白い雪へ居續ける
 色街を素面で通ひ馴れるなり
 色街の更けるにつれて按摩冷え
 そば一つ食ふて素見歸るなり
 色街の晝はまばらな下駄の音

籬 楓
 白 水
 加 香
 衣 通
 水 聲
 夢 心
 無 人
 燕 柳
 柳 々
 ト 柳
 雪 峰
 陽 亭
 柳 喜
 砂 路
 玉 塔
 鹿 政
 仙 村
 女 仙
 吟 女
 鎌 月
 苦 作
 無 限
 綠 之
 助 助
 吉 朗

塚崎松郎選

今日も灯がつけば行く氣そはくし
 色街に商用のある若旦那
 色街の火事に若い飛んでゆき
 色街の朝静かなり日は高く
 宴會の歸りでなごし初會客
 色街を少しはなれてあまい屋
 三味の音水に明るい灯がゆれて
 色街の兒は三味線をひきたがり
 色街で遊んだ事も自慢にし
 色街のちんころ迄も可愛らし
 唄ふ丈唄ひ色街しんこなり
 松島でうるさい奴の足を踏み
 案内人色街ですこ云ふたけ
 色街で先生に似た人さ會ひ
 恙ない煙色街を低う這ひ
 朝歸り酔ふたさ支ですまされ
 九官にまた妓丁は名を呼ばれ
 色街で切れた女に會釋され

鯉 友
 孤 舟
 蚊 射
 漫 樓
 幸 泉
 天 花
 寒 郎
 蒼 樓
 太 路
 光 三
 喋 期
 其 象
 壽 磨
 木 三
 金 子
 童 翁
 突 坊
 柳 秀

色街丈にまだ煙草屋も起てゐる
 不景氣をいつそ色街灯をともし
 色街へ来るミステツキ握りしめ
 友達さ来た色街を畫通り
 色街を息子なんにも知らぬやう

青司朗
 富久雄
 翠 峯
 聞 路
 衣 通

課題吟の選をしてゐるに同想や類句を
 相當發見する。こゝにいふ句を作つたが類
 句がありませんか尋ねられることが相
 當にある。類句に對する觀念上に就いて
 少し述べて見たいと思ふ。

各誌の課題選に於て散見する處では、
 多數選後の言としてこの類句のある點を
 指摘してこれが避くべきやう應募作者に
 誡てゐる。これはお互に心得ねばならぬ
 ことと思ふ。しかし乍らこの誠の意味を
 はき違へぬやうにして貰ひたい。例へば
 極く初心者でやつと作句しかけてまだ句
 になつてゐるのかならぬのかさへ自信の
 ない人達や、たゞへ初心を抜けた人の中
 にも、特に自信の句が出来た場合、或は
 まさに生れんさする句の毎々に、この句
 は類句がないだらうか、これも類句があ
 るかも知れぬなご、類句を極端に恐れ

色街を得意に持つて腰低う
茶撫願
色街にボヤでもあればなご思ひ
同
色街にたつた一人の伯母があり
新水
素見は戸別訪問しけるやう
同
固いのが色街でいゝ人になり
琴人
色街に馬鹿をつくして消てゆく
さ、舟
色街に近く數島二つ買ひ
同
色街を虚無僧の氣の永いこ
舟々
色街へ来て大金が恐うなり
同
鮎美
色街の畫へ富山の藥賣
同
おちよやんを夜泣の床几まど呼んで
同
出雲屋で見ると色街はけてゐる
毒仙
色街のゴミ箱漁るのも渡世
同
色街を妻に見せたい氣にもなり
同
色街の雨が嬉しい男振り
同
やはらかく息つく宵の藝妓街
羊司
色街に居れば其氣になつて居り
同
色街に昔の夢を抱きつゝ
同
色街へ自動車で來た事もあり
亂耽
色街を知つて男が弱くなり
同
色街のことで大臣調べられ
同
厚司着て出たまふ朝の廓なり
ひろし
色街に育ち有島びいきなり
同
いゝ男ばかりですが廓の運轉手
同
川岸の方は一現お斷り
同
若い妓に惚れてお酒の爛がさめ
豆
色街であくが目立つ色男
同

また選者せんじやの中には選句せんく中、同想類句どうそうるいぐに對しては甲乙の巧拙こうせつにかゝはらず、全々ぜんく没にする人もあるやうだが、同想類句どうそうるいぐミ

泣き止まぬ子へ糸屑を吹^くて見せ
糸屑も絹糸だけは取^りつて置き
糸屑を持たせて糸を買^ひてやり
糸屑は間に合ふまでに粉^を失^はし
叱^つられて指に糸屑もあそび
捨^つるにまだく惜^しい糸を抜き
ほききもりの母きてそつに^せ
糸屑を拂^ふて母は晝に立ち
しつけ糸屋つたまふ送り出し
糸屑を拂^つておそい晝仕度
糸屑にある日見積^る金の高
あけ機の屑を手まりに呉^れと云^ひ
満員車人の糸屑つけて降^り
糸屑の様に捨^てられた妾
糸屑の無駄を省^けて訓辭なり
糸屑をあつめて祖母はさう氣
糸屑が簪^の先で手古摺^{らせ}
糸屑をくわえて下女は封をきり
糸屑もだんく地味な色になり
糸屑をよせて針箱かたづけ
たきつける母に糸屑ついてゐる
糸屑を肩からさつて見せて呉^れ
糸屑も共に市場へついて行き
糸屑はくるくくと丸められ
糸屑賣^つて母に京詣^りをすゝめ
糸屑がふえて漸く世帯じみ
糸屑を拂^つてやつとのびをする
糸屑にまみれ親子の賃^仕事
糸屑をつけて女工の晝ごなり

燕柳 虛白 柳紅 逸々 二水 光哉 鹿村 吟女 木三 町二 金鐵子 童翁 北星 卜限 雪柳 天峯 陽喜亭 源坊 柳一路 正春 映紫朗 砂塔 鎌月 茶撫朗 漫酒樓 九柳 與詩夫 蒼梧樓

撫かつた糸は縫^れて屑を出し
針差しへ大切^な糸の屑
糸屑をつけて末ッ子あまつたれ
糸屑をつないで縫^た子のちんべ
きぬ糸の屑もたまらぬ世帯にて
糸屑が氣になる程^のなりでなし
糸屑をつけられたまま歸^つて來
佳吟
糸屑のいろく光る祭が來
糸屑の椽で植木屋煙草にし
糸屑が赤いばかりにからかはれ
似よつたを糸の屑から探^し出し
糸屑の中に光つた針が知^れ
糸屑になき母親の事も出^る
糸屑に姑少し口を入^れ
糸屑の中へお針子笑^ひこけ
糸屑へ來た三毛さつてほかさ^れ
糸屑の中に正札見^つけられ
いそぐミ立てば糸屑ぶら下^り
糸屑に母の昔を聞^かされる
糸屑で呼びさめられて又話^し
糸屑で吐^れ針で吐^られる
糸屑を夫が拾^ふうらかさ
糸屑を口につつて着^せる母
糸屑をとつて五六歩あるかせる
糸屑を曳^き摺^つてゐる針の山
糸屑で金魚の赤がさつミ搖^れ
掃き散^つた糸屑松に暮^れてゐる

柳秀 太路 歌三吟 七美佐 同 同 英豆 吞陽 突支坊 竹雪 千鳥 新水 幸泉 萬よし 舟々 鮎美 喙朗 其象 吐露樓 逸紅 源坊 琴人 寒郎 玉政

ると思つたので、この句は二點の部にも
らつておいた。一二三の句の難を評した
いのだが、紙面が足りぬし、本文の目的
でないので概念に止めておく。

以上私が選者としての場合には、類句
さいふ點に就ては餘りミがでない（初心
者の多い課題欄には類句のあることは致
し方がないと思つてゐる）それよりも句
の調子や修辭殊に、てにをは、を一番留
意されたいと思ふ。てにをはのおき方が
一字でも不適切であれば、ごんない、想
でも死んでしまつてゐる。てにをはの研
究會でも催してみたいとは始終思つてゐ
る。路郎氏の「句作上の常套語」などは
繰返して讀む必要があると思ふ。あれに
この、てにをは等の修辭の使方のやうな
のも交へて書いて貰へば尚いゝだらうミ
思ふ、その中に私も何か發表出来ること
があれば書いてみるつもりでゐる。

選者の質の低下

房川素生

糸屑をまるめて嫁はいいそよく
糸屑の中にもやはり目立つ赤
糸屑の中のボタンで間に合せ
母になれし糸屑籠であつたのに
糸屑をつまんで春もそこに見
糸屑は疊をなでて丸められ
雑巾をさせ糸屑渡され
糸屑があるさはごろ寝知らぬ事
糸屑が飛で来たなご猫思ひ
人前もあるに糸屑さつてやり

同聞路 同松郎 同羊司 同亂耽 同毒仙

古本屋

かほる

古本屋へ一緒にいる許嫁
古本屋客で夕刊忘れてる
古本へ霞バラ／＼と降つて来る
古本屋梅ごよみ等読み耽ける
學生をおろそかにせぬ古本屋
古本屋辭書を抱かへた客が来る
古本屋指さしすれば客が抜き
古本屋もついたらしく棚へさし
古本屋ブローマイド等賣つてゐる
古本屋奥にも何か積んでゐる
古本屋眼がね越しから値を入る
古本屋何日は無しに読み覺へ
古本屋湯に縁遠い人が立ち
煙草屋の店さならんで古本屋
古本屋街のほこりへ水をまき
古本屋唯ふあいそに灯がさもり

選翠峯 高峯磨 琴支人 突支二 町聲 眠聲 喋朗 青司郎 杏三路 柳一路 豆ひさし 天花 千鳥 伴内

糸屑の事で姉妹揉めてゐる
糸屑をへら引きもつてたしな
(人)糸屑の膝を拂つて抱きに立ち
(人)糸屑の日向はせいでせかぬ
(人)糸屑を指をくくつてゐて忘れ
(地)糸屑をつた子掃いた方へ逃げ
(地)糸屑をこり／＼母へ口答へ
(地)糸屑を丸めて嫁の氣が知れ
(天)糸屑のまりを残していい佛
(軸)糸屑を抜けば三寸ばかりで

同同鳥 千舟秀々 柳鳥 千露樓 吐露樓 松郎 柳乃 蔑乃

高橋かほる 共選

古本屋讀んでしまふ店へ出し
(佳)出ました残りときま古本屋
(佳)落題をはけまして古本屋
(佳)古本屋もう一角の店になり
(佳)友達の消息を知る古本屋
(佳)古本屋體を横にしてはいり
(軸)古本屋ろくろ首程延ばし
◇ 萬よし
古本屋覗けば本を直してゐる
古本屋廣告なしで賣れて行き
古本屋時々伸び欠伸する
弟の買ふて来たのは賣つた本
古本屋一家五人が食ふて行き
カーバイト眠そな夜店の古本屋
古本屋近處の家を尋ねられ
古本屋出鶴目にいふ値に負ける
古本屋にふさはしい紙幣を呉れ

源坊 九柳 高峰 照葉 竹次郎 天花 天花 杏三 富久雄 翠峰 衣通史 水聲 夢人 郊村 逸紅 雪峯

私は川柳の社會浸潤上からの大誌集中
論や、川柳家養成、又は、地方色保存の
爲の小誌肯定論は扱て置き、その多數の
柳誌發行に由つて多數に現れる選者の質
の低下するのを憂へる者である。

ある誌は同人が互に選者となり、ある
誌は、後援者、縁故者を選者にあけて、
敢て選者の素質の低下を顧みないのであ
る。折角川柳界が現在の狀態までに向上
し發展して来たのに、それ等選者によつ
て阻害せられることが、その人達の指導
によつて川柳家の養成せらるゝ事を喜ぶ
以上に案じなければならぬのは嘆はし
い事である。

現在の有様では、少數の初心者、柳誌關
係者以外の川柳家をのぞいては殆んど選
者の觀があり、選者さういふものに何の權
威もない様になる危惧をいだかされるの
である。中には、文法や句の解釋のおほ

賣つたのがまだ棚にある古本屋
 古本屋いつもの顔が讀みに来る
 古本屋二度ごは來ない氣で値切り
 古本屋指さしすれば客が抜き
 先生も隅で見てゐる古本屋
 古本屋汚れた地圖が軽くゆれ
 古本屋留守かと思へば讀んで
 買ひ戻す値段も申す古本屋
 古本屋向ふ委せの値を申し
 盛り場へ古本屋だけ叛いてる
 古本屋もう一つ角の店になり
 古本屋 釋迦さ孔子が棚の隅
 古本屋親父も一緒に讀んでる
 臺灣の紙幣が仕込んだ本から出
 町内の物議に上つて古本屋
 古本屋目方で買ふて冊で賣り
 友の著書古本屋にて見付け出し
 古本屋女房絶對値を負けず
 古本屋呼ばれて評價だけの事
 座布圖で皺伸ばして古本屋
 古本屋並んで辻の車止め
 古本屋包み紙だけ新しく
 何といふ甲斐はないとか愛書賣
 悠然と隠居のいる古本屋
 古本屋絶版もので客をつり
 恩給の外に古本の小商ひ
 古本屋ばかり漁つて新知識
 出ましたらのけこきと古本屋
 古本屋時々文士來る話

柳一路 源坊 愛波 眠聲 高峰 青司朗 狸仙 砂塔 北星 無限 照業 六造 蚊注射 突支坊 藤寺仙 幸泉 竹雪 漫酒樓 二水 壽磨 玉政 鹿村 寒郎 木白 金鐵子 童翁 九柳 羊司

古本屋作者の履歴知つて居り
 この街の明るさに住む古本屋
 失職の藏書で開く古本屋
 口實を又古本屋見付け出し
 古本屋街の埃へ水を撒き
 古本屋賣りに來たのへ愛想なく
 古本屋案内政治通であり
 古本屋にラテン語が讀める
 古本屋 高い處に八雲集
 古本屋出る近眼へ陽があたり
 全集が應へました古本屋
 先代の藏書をほめる古本屋
 古本屋主義の批判も軽く言ひ
 古本屋勝手に特價なきを押し
 古本屋腹の立つ程なき付け
 古本屋そこらさなく出で來る
 上段は賣れそうもない本ばかり

新水 與詩夫 太路 喋鳥 千象 其花 天月 鎌人 琴蔓 豆陽 吞耽 亂格 蒼梧 柳秀 同 琴人 吐露樓 天花 鎌二 町敢 柳秀 北星 秋三吟 吐露樓

つかないのはまだしも、課題をさへ理解し得ざる選者が現はれてゐるのは實に慨嘆の至りである。

殆んどの作家がその弊を認めてゐながら、決然とそれを口にしないのは、すぐ將來に自縄自縛となつて己を苦しめる事を恐れてであるとしたならば、益々嘆し至りてあらねばならない。

私の所謂選者達は（路郎氏の所謂いふ語を借用します）誌上、席上に於て、堂々として、謙遜的態度で選句の披講をせられるのである。その時若し席上で假りに傍にある先輩選者、その他列席投句者に、抜句の價值、句意なきに、質疑、又は抗議せられたとしたならば、相當なる自信を以てそれに應答し得る人が幾人あるであらうか。又没にした句の責任を對して其の勞苦を無にした丈の責任をいかにして持ち得るであらうか、難解の字句、書體（これは投句者の責任でもあるが）、句意の正當なる解釋に努力を惜まなかつたであらうか。披講の際誤つた讀み方をして取消す選者や作家と別な句意

川柳書架 (廿九)

時代川柳大觀

武笠山 柳 閣
森田 陽 東 著

▲本書の「はしがき」を抜く。

一、本書は史的内容を有する川柳狂句を
集集し、之を時代順に分類配列して、夫
々に解説を施し、語句の頭註を加へたもの
である。一、史的事實を借りて當時の世
態人情を詠んだと思はれるものは、句頭
に○を附して區別することにした。一、
句中卑猥なものは、力めて之を省略した
尙ほ同吟の類はその一を記して、他は相
異なる部分を頭註に於て示すことにした
一、人物なり事件について解説を施すに
際し、史正に據るの外、戦記物語、謡曲
淨瑠璃、稗史、傳説、俗説等に據つたが
一々その曲據を斷らなかつた。幸ひに諒
させられたし。中略二、本書に引用した
川柳狂句は、誹風柳樽六十篇、柳樽拾遺十
篇を主とし、その他既刊の川柳書に仍つ
て補つたが、著者の粗漏のため逸したも
のもあることと思ふ。尙柳樽六十一篇以
後は不幸繙讀の便宜を得られなかつた。
此等のため加へられなかつた句は、他日

何等かの機會に於て増補したいと思つて
ゐる。(下略)昭和元年十二月鶴東しるす
▲昭和二年二月廿日發行。四六版七八九
頁。索引七七頁。定價參圓八拾錢。東京
市日本橋區通四丁目五番地春陽堂發行。
▲本書ははしがきにもある通り、川柳狂
句の詠史集に解説を施したものであるか
ら、興味的に讀むなら兎も角、川柳詩の
立場から見る時には價値の頗ぶる稀薄な
ものである。しかし、川柳狂句を史的內
容の時代順に配列した著者の努力に對し
ては同情しない譯には行かぬ。

新刊紹介

すきなみち(一) 外骨氏編纂

古い新聞雜誌が如何に貴重なるものであ
るかを知らしめ、その保存文庫の設立が或
る人々等の放言するが如く無用の廢物蒐
集でなく意義深き有益の事業である事を
示さんがため、明治史料を發行したが、
更に史實の根本たる新聞雜誌の製作者は
如何、その時代の傾向は如何等を察すべ
き資料なくば、これが「すきなみち」發
行の理由であると外骨氏はその例言に於
て述べてゐる。東京市本郷區向岡彌生町
二番地半狂堂發行定價金貳圓五拾錢。

に取る選者さへもあるのである。嚴選さ
稱して、自分の不可解な句や他の選者か
ら價値を危まれるかもしれない様な句を、
闇に葬つて自己の非難を避けてはゐない
だらうか、又緩選をして、投句者達の己
れに對する不評判を遁れ、自らの不明に
よつて見逃す秀句を危くさめる方法を
三つてゐないだらうか。選句後一言もな
くて責を果たし又は大選者の態度で大き
く出て評言し初心者をくらし謙遜的辭
を以て選者たる光榮を謝するなご何れも
選者の見識を汚してゐるが向かつ選者さ
して臨まなければならぬであらうか。
私はそれら選者達に非禮な言葉を書き
て喜ぶものではない。川柳を益々盛んに
しある程度まで續けて來た作家の消へ去
るのをなげくがための言に外ならないの
である。終りにのぞんで後輩の私が失禮
な言葉を敢てした事を許して戴きたい。

誌代改正に就て

社告

▼昭和三年度より本誌誌代を左の通り改正いたす事になりましたから御諒承願ひます
一部定價は従前通りです。

普通號 定價一部 金參拾錢

新春特輯號 定價一部 金五拾錢

八月特輯號 定價一部 金四拾錢

▼郵税は從來通り本社で負擔いたします
(郵税は創刊當時から見ますと二倍となつて居ります)

▼量の上から見ますと頁數が二倍になり
内容が三倍以上になり同時に質も大變
よくなつて居りますので以上の改正に
就ては御賢察を煩はします。一見、繼
續購讀者の御厚意にそむくやうであり
ますが、御優待の方法は他に幾らもあり
ますので御寛恕を願つて置きます。
この改正に於きましても特輯號を愛讀
者各位に對しては普通號と同様に取扱
つてあります。

年賀刺廣告を募る

◆奮つて申込まれたし◆

▲一口 金五拾錢

幾口分でも申込んで下さい。一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます。廣告料は前金のこき。(郵券代用は一錢切手に限る)

申込期限十二月五日迄(新春號)

大阪市港區八條通二丁目一二

申込所 川柳雜誌社事務所

振替口座大阪七五〇五〇番

轉居

金澤市味噌藏町裏町四二
安川 久流 美

匿名通信に就て

蛭子省二氏が本誌に寄稿されたものに、匿名でいゝんなことをいふてやる人があるさうですが、研究上の問題について、いささかの遠慮も要らないと思ひますから、假面を脱ぎすて、誌上でまのるみなり(尤もつまらない原稿を一々掲載することは出来ないが眞面目なものに對しては紙面を充分割愛したいと思ふ)又は直接通信をされるなりされた方が男らしくてよからうと思ひます。同氏は黒頭巾に對して非常に迷惑を感じてゐられるのでごつかの陽へその旨を發表して置いてくれとのこと故その人達にまで特に申上げておく次第です。(編輯子)

缺本お譲を乞ふ

「大正川柳四二號、四三號、四四號、五一號、五四號、川柳雜誌社編輯局内(A生)

近作柳樽投句家へ

句稿を書く前に必ず、

大阪 旭櫻

の如き形式で所ご雅號を楷書で明記され
たし。作家の住所が落ちてゐたり號が草
書のため不明の場合があるので清記に困
るからです。



詩 漫

少し^やあ考へろよ

長 野 晴 濱

ごろほう君、今晚は
君、何用で来た？

ふざけるない、
いやに落附いた真似なんかしやあがつ
て。

ぐづぐづいふミ叩つ斬るぞ、
これが見えぬか、これが、
出せ、うぬ、有りつたけ出せ、
金を、すぐ。

いや、狼狽てんでもいい、
騒がんでも、おごさんでもいい、

おごされる俺ではない。
だが心配するな、金はやる、今。

なんかミ言つて時間をのばして
そのうちに何ミかする積りか。
電話の線は切つてあるぞ。

へん、笑はしやあがる、
早く出せ、
出さねにミこれだ、
いいか、これだぞ。

俺は斬られるのは御免だ、

だから金はやるよ、

お前なぞミ喧嘩はしたくないからな。
だがその前に君に一寸話をしてみたい
んだ、

金はやるからな。

いゝから金を先へ出せ、

出さなけりや叩つ斬るばかりだ。

これが見えぬか、これが、

やつけたくはねえんだが仕方がねえ
見せしめだからな、

これからある事だからな。

おい、人をおどして金を取る事はい、
事が悪い事か。

君にも良心はあるだらう。

金はやる、

やるが、まあ、考へてみる、

少しは考へてみる、

人間として。

何言つてやがるんでえ。

悪い事は承知の上だ。

だが其れがごうしたと言ふんだ。

悪いと思ふなら止めろよ、

いゝか、悪い事は止めろよ、

俺は今、誠を以て君に言ふんだぞ、

さあ、金はこゝにある、

入れ物ごと持つて行けよ、

そしてこれからもう止めろよ、

そして眞面目に熱心に働くんだ。

いいか、

然うしたらもつともつ三割のいい日常

にもならうし、

お前の身にまつて安全でもあるし、

第一、我が國の國民として耻しからぬ

者になれるんだ。

俺は眞心で言つてるんだぞ、

わかつたか。

今は我が國にまつて實に容易ならん秋

だぞ。

一人でも多くいい人間を、

國家は必要としてゐるんだ。

少しやあ考へるがいい。

それぢやあおめえ、おめえの會社へ世

話して呉れるか、

使つて呉れるか、俺を。

じよ、ぜうだんを言ふな、

考へてみる。

おめえは金持で重役ぢやねえか、

人間の一人や二人、

會社へ入れられねわつて事があるかい

べらぼうめ。

然ういふことを言ふからいかん。

おんぶと言へば抱つことと來る。

人間は然う依頼心ばかり強うてはなら

ん、獨立心を持たねばならんぞ。

いいか、うむ。よく聽いておけ。

そしてわかつたら、

さあ、金を持つて歸れ、歸れ。

おめえ中々膽つ玉すわつてゐるな、

俺が押込むぞ、

がたがた震へやがるんだがなあ、

てはけの奴あ。

はつ、はつ、はつ、これは光榮だ、

ほめられちやつたな。

だが要するに修養だ。

だがおめね、物の道理はわからねいな

なんだ、失敬なこゝを言ふな。

これだぞ、

これだぞ、

大聲なんか出しやあがるぞ。

いいからもう歸れ。

俺は働きてゐんだ。

本當いへば泥棒なんかしたくねゐんだ

だが職に離れて口がねゐんだ。

捜しても捜しても、

いつまでたつても根つからねゐんだ。

よし、おい、おめねに一番尋ねよう

かい、

おめえ、平氣で、女房子に食はさねえ

でゐられるか、

おめえ、平氣で、落附き拂つて、

餓ゑ死にさうふ事ができると思ふか。

眞面目に働いてりや、

世間がそんな事にやさせないんだ。

お前、もう少し眞面目に考へろ。

おめえはいゝ年をして世間知らずだな

それとも知らねえ顔してるのか。

もういゝから歸れ。

えぱりやあがるない、横柄な口をきゝ

やあがつて、此のわからずやめ。

てめえこそ少しやあ考へろよ、

人間として。

もういゝ。

だがお前も後でゆつくり考へて呉れ。

俺は誠心誠意で言つてやつたんだ。

何なりと正業に就いて、

そして修養を積み、修養を。

ふん、禮を言ふぞ、えいつ。

わつ、いたつ、うゝむ。

ばか、ばか、

死ぬにやあ及ばねえ、

鹹りぢやねえ、

峰打ちだ、

峰打ちだ。



川柳塔

○ 西本三笑

母さんが云ふなミ云ふて食べさした隣の子泣かして歸す日もあつて妹一人が邪魔だすミ姉藝者惚れなんだ僕を今更こはかうう愚痴云ふてくれよいつまで襦を持つ十二月娘賣られる事を知り初産に手酌見かねた里の母さうせこうなるこさ養子二本呑み添うて見りやよいか知らねミ十七だ働きに來た大阪に酒がありクレヨンの色にも肺を病んで見ん

○ 高橋かほる

ゑゝのんを取り持つさうミするめ焼き陶然ミ目鏡を上へ上けるなり心齋橋を北へ渡るも十二月内縁の幸か不幸か子は流れ宿茶も配らず法律事務所來る

○ 安西杏三

見えすいた世辭に病人目をつむり同病で死んだ話を寒く聞き漂泊の旅越方は灰のやう洋館につぶされそうに歩いてる笑つて高座何處かが眞面目にて資本論出した本屋の餘剰價值

明治節

喜びを明治にかへすよき日にて

○ 横田 眠 聲

良心の可責鼠にびつくりし
其笑顔何か無心の色が見え
妻の箱古い鹿の子がつめてあり
さか夢にしても氣になる内の人
税金の事で金持ごてくさ
誕生日つたい歩きに總がかり

○ 岩崎 柳 路

不自然な髪を新しがつて結ひ
手の筋を女素直に出して見せ
一七日まだ御近所の世話になり
嵯風會酒と女を先づ嫌ひ
洗粉の匂ひさ向ふ朝の膳
去つた女の香がまだ残る掛蒲團
大袈裟な西洋人の日本服
馬鈴薯の芽が延びて居る流し元

○ 高見 柳 骨

居候案山子の役も勤めたり
横町も同じ景氣で列べてる
淋しさは火鉢の炭も消えてゐる

秋雨のしとく降る日廓の灯

○ 酒井 駒 人

嫁の來た當座さ違う口を利き
墓地の柿小供が落す寒い朝
近道を女の方が知つて居る
入院さきめ金策に行く羽織
府縣會すてつべんから停會し
おつちやんさ呼ばれる毎に損をする

秋風落漠

秋風に喘息だより待ち兼る

○ 尾添 雷 相

親あれさ矢つ張親に氣兼ねする
當然の事に興奮する若さ
零落の所爲瘦犬にさも似たり

○ 川合 舟 々

駈けて來るのにも女をくづすまい
鋭敏な鼻にあしらひ兼てゐる
色彩にばかり目のない女なり
ゆるうゆるさねと下死んでゐる
勝ち誇る様に男は近寄らず
停留所霧の深さを思ふ聲

中澤 濁水

○ 行かずとも好い宴會へ行くに定め
俾の柄上けるとみんなお禮をし
コツコツと吹いて石屋は顔上げず
賣れ残る宅地を野菊狭く咲き
滿蒙までも知つて家賃が滞り
貸してやる氣で縁談を纏めて居

○ 庄萬よし

咳をする隠居一番電車聞き

一番ひ飼へば氣になる小鳥市
公室に艦長の趣味ありはあり
道德の極致なまこの如くなり

○ 麻生 葭乃

一心寺の墓に隠れて歸る也
信念の弱さ橋から落ちる也
信すれば彌陀の光の水の色

○ 橋本二 柳子

天の川が見ゐると外で云ふてゐる
我よりは先に死ぬなミ子を思ひ
かたむいた松を見て山を降りて来る
合點が行くまいが皆ついてこい

柳友の結婚に

新妻よちかく坐つて話さんか

粒々集

○ 金澤 安川久流美
圓満な顔で小使鐘を打ち
燃の出づる草もあらうに土へ鐘
方針を定めた晩に備け口
女の兒男のあけた風の夢
居眠りの兒に愛のある女教員
ついて来る子を慈しみ登り坂

又引越して

森出づる旅の今宵は川に添ひ

○ 大阪 塚崎 松 郎

燈明ぢりゝ父の聲かと思はるゝ
十圓一枚鏡の前にしやんごさせ
灰皿の煙も絶へてしまひける
捨られはせぬかしきりに虫が鳴く
秋さびしうがひ藥をこしらへる
逢ふて戻れば來てる肩入
天井へ耽さらすこと五十年
巻紙に嘘をならべて欠伸する
膝枕密柑をむけば口を開き
叱るにもこの子ほめるにもこの子
お歳暮を持つてくるのを待つてゐる

警察のかぎに子守の日南はこ
母の口に飴玉一つながくある
若い燕障子を張れば皺ができ
煙草なま買への五圓は多過る
自動車へ三味も入れたい息子の氣
子が出来て番頭五圓あがるなり

○ 堺 河野 春 三

心配を二十四時間持ちこたへ
その外の戀をきかれて腹が立ち
殺人のやうにカーブのヘッドライト
姑に疊の針を見つけられ
うちまけぬまゝに末期の水となり
虚榮心吐りつけたる貧しさよ
身一つを任せば男白々し
戀をして時計きつしり合つてゐる
齒科醫を出るに青きたそがれ
碁をうてば碁へはつきりま辯を見せ
ひつそり三郎下へ秋がうつつて居
泣いた兒に夕焼といふものがあり
紙幣束へふるふ手つきを笑はれず
金儲けしらぬ女の派手な帯
此頃の私
父となりすぐ玩具部へ足がむき

○ 大連中野 柳 陽
頑くな皺にまかせてさからへず
葉に媚びて居る一輪の花哀れ
忍従の若さの太刀が鞘走り
二一〇、三〇夕

○ 魚崎 柴谷 柴舟
洛外秋行(四句) (十月廿二日)

自動車に小原女路をよけて居る
水車小屋曲ると柿がなつて居る
遊びの手やめて立つてる村の子等
枝に付いた柿賣つてるも田舎らし
民政黨演説會(公會堂) (十月卅日)

折角のあてば拍手に消されたり
先生さ云はれて出たは白髪にて
○ 御影長崎 柳 秀

力瘤みせて舞妓をいやがらせ
ほんやりと虹を見てゐる失業者
菊畑下僕一日犬を追ひ
本復にしみぐと知る親心
往診から歸り玄關の下駄を見る
つつかけの下駄が追ひつく忘れ物
すけかゝる鼻緒に女氣が迷ひ
心中へ明日のおたちを聞きに来る

古句質疑

蛭子省二



質疑小規

(一)質疑は古句に限ること。なるべく古句の出所を書添へて置くこと。(二)質疑ははがきで一人一回三問までのこと。(三)質疑のはがきには住所姓名を明記すること、但し誌上の匿名は差支なし(四)一度答へた句、未番の句等については答へない。(五)質疑應答は必ずしも先着順ではない研究の餘地ある句は次號廻はしとする。質疑輻輳の場合も又同じ。(六)質疑は必ず本社古句質疑係宛のこと。

親にて候ものへ御扶持をねだり

質疑者

舟

行(大阪)

(十五ヘン)

何の諺から出て居るかこの、お尋ねである、私は持病治療法として勧められて、四十番許り稽古をしたが、却て結果が良くななく中止してしまつた云ふ、不熱心者、諺曲の文句取には常に随分苦しむ、此句も一つであつた。諺關係の質疑が多い所をみるに、諸氏も同様らしい。

「放下僧」ツレの詞に「かやうに候ふ者

は、下野の國の住人、牧野の左衛門何某が子に、小次郎と申す者にて候ふ。さても親にて候ふ者は……」とある。他にもあるかも知れぬが、こんな事を苦しむで探さねばならぬのはお互に因果で、句意はお妾の親御であらう。娘が米櫃どころか大小になつてくる。

兄にて候ふものに大小をねだり(古句)こんな事は昔も今も、かはりはない。

親にて候ふものに討れ拙者薄手(古句)云ふのもある。即ち吉良の養嗣子佐兵

衛佐を詠むたのである。

過る日、十四編に「まれ人も御らんすらんに眉間疵」を夫妻で俵何んだらうと考へた末にわからず、翌朝「狸々」(の地)理や白菊の着せ綿を温めて酒をいさや汲まふよ(シテ)客人も御覽すらん(地)月星は限もなし……(狸々)なぎは初步に兎も角教へて呉れるものなのである。

魚尾の黒子で妾計御ちようあい

質疑者

井川 梧樓(満州)

(二九ヘン)

手元^{てもと}に人相^{じんさう}形貌^{けいぼう}學^{がく}の參考^{さんこう}書^{しよ}がないので、
詳^つに申上^{まうしやう}げ兼ね^{かたじけなく}るが、柳雨^{りゅうう}さんは「

魚尾^{ぎょび}の黒子^{くろこ}」を。泣き^なはくろ^{くろ}こ註^{しゆ}して居
らるるから、そう御承^{ごしょう}知^ちが願^{ねが}ひ度^どい。小
西^{せい}白眼^{びやくがん}學^{がく}舎^{しゃ}の觀相^{くわんさう}秘錄^{ひりく}に、眼圓^{がんえん}らにして
魚尾^{ぎょび}（眼尻^{がんし}の切れ筋^{しん}）のない者は利己^{りき}、
冷館^{れいかん}、恒心^{こんしん}なき人物^{じんぶつ}云々。男女^{だんな}共^{ども}に悉^{ことごと}
く眼^{まなこ}が小さくして圓^{まる}らに、魚尾^{ぎょび}と稱^{なづ}する
眼尻^{がんし}の處^{ところ}が切れをなしてゐる。これは好
色^{しよ}にして貞操^{ていそう}に誤^{あや}りやすきをあらはす
牛^{うし}がたのあたまの出來^きる十五^{じふご}日^{にち}

（十七ヘン）

質疑者 山田 春風樓（三重）

祭禮^{さいらい}の句で山王^{さんおう}祭^{まつり}は六月^{ろくがつ}十五日^{じふごにち}、神田^{かんだ}明
神^{あきかみ}は九月^{くがつ}十五日^{じふごにち}、祭^{まつり}の景氣^{けいき}は東都^{とうと}歲事^{さいじ}記
等に詳^つしい。

暗闇^{くらやみ}へ牛^{うし}を曳出^{ひきだ}す十五^{じふご}日^{にち}

と關係^{かんけい}係^{けい}句^くです。此^{この}牛^{うし}は九月^{くがつ}號^{ごう}拙稿^{しやくかう}光州^{くわうしゅう}
雜筆^{ざっぴつ}中に書^かいた高輪^{たかろ}の牛町^{うしまち}から雇^やひきた
つたものである。

九州^{きゅうしゅう}にはびこる鳥^{とり}を鎌^{かま}で切り

（十二ヘン）

質疑者 飯田 小魚（岡山）

日本^{にっぽん}武尊^{ぶくみ}が川上^{かみかみ}梟師^{せうし}を御征伐^{ごせいばつ}遊ばした

故事^{こじ}の句で、其折^{そのせ}り女裝^{じよさう}を致^{いた}されたこあ
るから

嫁^{よめ}のふきかへ魯智深^{ろしじん}と日本^{にっぽん}武
加役^{かやく}で當^{あた}る魯智深^{ろしじん}と日本^{にっぽん}武
がある（加役^{かやく}とは立役^{たちやく}から女形^{にょがた}に扮^{はな}する
事^{こと}）鎌^{かま}で切りこは近江^{おうみ}に老蘇^{らうそ}神社^{じんじ}云ふ
があつて、和歌^{わか}では老曾^{らうそ}の森^{のもり}さよみ（謠
曲^{うた}の朝長^{あさなが}にも、近江路^{おうみ}や瀬田^{せだ}の長橋^{ながはし}うち
わたり、猶行^{なほゆ}くするは鏡山^{きやうざん}、老曾^{らうそ}の森を
打過^{うちか}ぎて）
東路^{とうろ}の思出^{おもひで}にせん時鳥^{ときどり}老曾^{らうそ}の森の
夜半^{よはん}の一聲^{いっせい}

後拾遺

忘れ^{わす}れにし人^{ひと}をぞ更^{さら}にあふみなる

老曾^{らうそ}の森^{のもり}に思ひ^{おも}ひいでぬる 六帖

之^{これ}を俗^{よこ}に鎌^{かま}之^の宮^{みや}と稱^{なづ}し、日本^{にっぽん}武尊^{ぶくみ}がク
マツを殺^{ころ}し給^{たま}ふた際^{とき}御用^{ごよう}ひになつた、鎌^{かま}
を埋^うめ祭^{まつ}つてあると云ふので

御本社^{ごほんし}のあたりへ鎌^{かま}をうめ玉^{たま}ふ
と云ふ句もある。

陳皮扶苓^{ちんぴふりやう}見^みかぎつて彌十郎^{やじうらう}

（十二篇）

質疑者 中田 章太（新潟）

陳皮^{ちんぴ}も茯苓^{ふりやう}も藥種^{やくしゆ}の名^な、彌十郎^{やじうらう}は小西^{せい}行
長の事^{こと}、藥屋^{やくや}をやめて一方^{いっぽう}の大將^{だいしやう}となつ

たこの意^い。彌十郎^{やじうらう}彌九郎^{やきゅうらう}彌太郎^{やたろう}説^{せつ}に就^つ
ては柳橋^{りやうきやう}研究^{けんきゆう}誌^し三^{さん}の四拙稿^{しやくかう}に、詳^つである。
九層^{くさう}倍^{ばい}ここが攝津^{せつ}に任^{まか}ぜられ
人參^{じんじん}は行長^{ぎやうぢやう}殿^{でん}に見^みてもらひ
迄^{まで}位^{くらい}はよいとして
首帳^{くびぢやう}の寄算^{きさん}するに小西^{せい}が出
なご、兎角^{うごく}當實^{たうじつ}人^{じん}扱^{あつか}されてゐる。





各地柳壇

明治節句會

本社十一月例會を明治節句會として三日午後六時卅分より瑞坊で開催しました。當夜は瑞石、狸仙、蒼梧樓、第一郎、直三郎、笹舟、の諸君等の新顔と東京から石坂梅子さんが來會されました。秋の夜長を七題も課して作句三昧に浸りました。參會された人々は、路郎、幽香、松郎、萬よし、ひろし、飯山、加香炭車、悟道樂、瑞石、柳々、白帆、九柳、鮎美、十紫、狸仙、蒼梧樓、双葉子、第一郎、想人、十字路、開路、直三郎、葉平、無凹、亂執、陽喜亭、孤舟、笹舟、長門、琴人、素人、武子、梅子、多喜女馬行、かほる、毒仙、舟々、赤城、五六八、新水春陽、其象、源坊、翠峰、流星、彩秋、三笑と私の五十名でした(二柳千記)

噂(兼題)

路郎

藤壺に御廊下、長い、長いものよく釣れる噂に父はまた出かけ噂を氣にせずお父さんく聞合せそんな噂も聞きは聞き裏書をするかのやうに後家はらみ噂の中へ又ひよこくさや々来る新聞辭令に終つた朝を飯倉する噂ばかり氣にする母のよわくし君だからくさて云ひあるき辭職するつもりなのやうに云はれて風呂屋での噂巡査も聞いて去にこの土地にをれない。に人が云ひ噂はごもない銀行の倒れやう山を賣る噂親類かけつける散髪屋もうあの噂やつてゐる

選梅子 多喜女 開路 毒仙 葉平 十字路 蒼梧樓 狸仙 鮎美 赤城 舟 芳柳 觀月

七十五日この大阪を離れよう美しく噂をされて嫁に行き噂通りなられるものと逢うてゐる人の口うるさく京の田舎に居噂に違はず極端な資本主義色々の噂をしよつて後家は死に訪れる噂ごころか二人棲み校長はたゞの噂にしておかず噂なごどうでも羽織きせに立ち(軸)噂に聞けば仲居になつてゐる

師匠 幽香

お借りした師匠のきせるつまらぬ子の弱いこに師匠はなやまれ撥だこをなめて師匠のおもへらく行くくは添はせる腹の師匠なり双六の顔を師匠は立て、おき玄關へまでを師匠におくられて舞渡師匠甲斐くしく動き猫板へ師匠かんしやく立てゝゐるみつちりさ仕込む師匠は叱りつけ呼ばれての師匠の詰淋しすぎ満員のなかで師匠の足を踏み洋服で来る師匠のやうでなし笑ふのへ師匠眞面目な笑ひやう伊達巻のまの師匠へ畫さなり

五客

しごやかなうちに師匠のさげけお師匠に逢うて千日ついて行き手拭も師匠が持てば派手に見ね笑はせておいて師匠は鼻をかみ

素人 亂就 眠柳 燕園 藤行 馬郎 同路 選郎 松城 赤笑 三人 飯山 十字路 柳々 多喜女 源坊 鮎美 同聞 同路

萬よし 二柳子 松郎 かほる

取つて呉れどは横着な藥劑師
藥劑師殘念ながら手に合はす

祝言

祝言にくやしい女一人あり
祝言の時に忘れられぬこゝ
祝言は皆人並にすませぬ
初恋を二つ秘めて御祝言
祝言に眼鏡は重く曇つてゐ
祝言に嫁はまげうつつむいて
祝言の外は大分積んでゐる
祝言のもうすむ頃を降つて來
祝言の其の場からたつホムーン
祝言をしてから旅に一人出る
祝言にこそぞさなちの高砂や
仲人の謠の下手なこらへかれ
四海波靜かに母の眼はうるみ
祝言を知らぬ夫婦で仲が良
祝言はどないでもよい二人なり
祝言はくいですまい二階借
祝言に開かね機がはづれかけ
ぶさいくな顔で祝言まじめなり
お開になるころ聲の酔はさめ
嫁ぐ前祝言の夢毎晩み
祝言におちついてゐてうたぐられ
祝言にみな怒のない顔なす
息づまる程に祝言靜なり
祝言に慾目か息子幅があり
祝言に嬉し涙の乳母をもち
祝言と知らず腹の子また動き
孕んでる祝言に嬉笑ひかけ
祝言はすんだが足が立たぬ也

同飯山

節高の手は祝言のまざるしく
祝言に母もうすうにぬつてゐる

同鮎美

九選

樂隊の方へ生徒は氣をさられ
樂隊が角を曲つて子は戻り

同鮎美

亂柳

樂隊が通角曲つて子は戻り
泣きやんだ子が樂隊へ一人來る

同鮎美

三武

樂隊の太鼓乗れない満員車
樂隊を入れても不景氣を如何せん

同鮎美

翠峰

樂隊は救世軍も知つて出す
樂隊は吠け立てゝあるブルドック

同鮎美

笹舟

樂隊は行進曲に踊りすぎ
樂隊もそばで見れば樂でなし

同鮎美

萬よし

力走へ樂隊だん／＼せはしなり
樂隊さひつたくるやうに速さ出る

同鮎美

十字路

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

彩秋

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

無四

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

梅子

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

毒仙

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

双葉子

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

十紫

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

幽香

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

新水

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

悟道

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

理庵

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

柳仙

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

松耶

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

馬行

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

想人

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

源坊

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

路那

樂隊のひゞくほごには實れもせず
樂隊が通る子供が飯にむせ

同鮎美

啞人送別會

本誌創刊當時活躍されてゐた舊同人 吉川啞
人十數年住み馴れた大阪を離れて郷里山
口縣久賀町に永住される事になりました
で十一月十七日午後六時卅分より端の坊で
送別會を催しました。啞人氏迷亭氏の席題披
講があつてから、主幹路那氏は兼題披露に先
だち啞人氏を送るの辭を述べられました。

樂隊が通るさ店の客が出る
樂隊を格子から見る嫁入前
樂隊へ見送るやうに子供つき
樂隊の通るあひだは泣きやまり
樂隊のひまは椅子など寄せて來る
樂隊のアートへ行くに越えぬ
樂隊にわたつて子供に縛る
引きつかけの子へ樂隊のひゞくこゝ
大太鼓だけがひびいて曲馬團
樂隊の一人調子がはづれてゐ
樂隊はだん／＼赤い顔になり
同など静ばかり樂隊やつて行き
樂隊に書齋でなしの筆を小
樂隊においで／＼さむころ小屋
樂隊に今寝た子供覗いて見
自動車で走る樂隊呆氣なし
樂隊が來てせり賣屋わやくちや
樂隊の一人ついならころげさう
樂隊が過ぎて煙草屋一つ賣れ
樂隊は心得たりと溝を越えぬ
樂隊は橋を渡るさ又始め
樂隊に子守うか／＼二三町

同翠峰
同柳
同九
同飯山
同三笑
同ひるし
同亂耽
同笹舟
同炭車
同松耶
同柳
同々

三松啞ひ靜莢迷雅翠惡伴青芦芳木聞大孤蒼幽同貼同飯同路同貼
次山子耶人し雲豆亭柳臣峯源內子穗松仁紅舟樓香美山耶美美選美

春宵一刻を一人寝る
 一人寝の寝がへりなうつ三昧の音
 一人寝の足きんだだけつ温み
 一人寝のきのやりにだに冬が来る
 獨り寝の黄表紙にも讀みあいて
 一人寝は何偏も枕かへてみる
 國へ出す手紙を書いて一人寝る
 大の字に一人で寝たい百疊敷
 一人寝を淋しがらせる雨の音
 一人寝に伸びるだけ足伸ばして見
 一人寝の壁に美人のブロマイリ
 一人寝の癖を敵娼見抜いたリ
 一人寝へ袂が邪覓な話し聲
 一人寝の顔に新聞かぶつてあ
 決心もつかず一人寝向を替へ
 一人寝をもう慣れて切つた寺男
 一人寝は勝手ちのちがふ朝になり
 平凡な心になつて一人寝る
 一人寝の噂をきいて惜しがられ
 一人寝の膝から寒い風を知る
 一人寝の髪がゆれてる塗枕
 一人寝へ子供一晚預けられ
 一人寝のケツットの穴に冬が来る
 一人寝はうつかりこぼすのを置き
 一人寝の雜誌をあげたまの朝
 一人寝の掴みごこなく手のばこ
 一人寝の炬燵を無性もてしま
 一人だけ寝るのにねらい音を立
 あるだけの蒲團を出して一人寝
 一人寝の水の音にも慣れて住み
 獨り寝の月じまりも露路に住み

葉平 靜雲 青紅 大喜女 彩秋 水念仁 孤舟 芳陽 三笑 芦穗 雙葉子 啞人 翠峰 松山子 溪花坊 文錢亭 迷香 幽々 舟々 十紫 久路 萬よし 蒼梧樓 同 ひろし

一人寢へ女房の手紙ばかり来る
一人寢に休みが二日續くなり
一人寢へ邪氣臭い戸を叩かれる
ふみどころなき一人寢の枕もさ
ひざり寢の玩具の虎に見おろされ
ひざり寢のこの額ももう見飽い
一人寢の電車はあるかなと思ひ
一人寢の自分の事を考へず
一人寢のむきなかへれば壁があり

川柳雜誌社
糸屋町句會

十一月八日 川合舟々報
兼題 臨 月 松

臨月ノ柱時計はよく止まり
斷りに出る臨月は坐なり
臨月の思はぬこゝで火事を見る
問題のまゝ今日明日の腹さなり
臨月を恥し乍ら親に會ひ
臨月になつても妾塗つてゐる
臨月になるさ安産だけの慾
臨月を思ひ通りにさせておき
町内の臨月同志露路で會ひ
臨月に近く湯殿も建て増す
人込みをかへ轉任せよならず
人込みを抜けて臨月ぼつとする
臨月にはつきり知つた男の氣
夢さめて臨月腹をなで見る
臨月に節期だんく追つて來
眉毛の薄さ生るゝ日の近く
居残りへ今夜あたりに生れさう
出勤のあさは臨月淋しくて

飯 同 松 同 路 同 英 同 同
山 郎 郎 豆

郎選 雙葉子 染子 久郎 蒼梧樓 鮎美 三笑 新水 二竹 同 ひろし 同 流星 同 悟郎 同 萬よし 同 翠峰

席題 座蒲團 互選

座蒲團をけつて暫らく考へる
 座蒲團をはなれてからの長話し
 座蒲團の柄が判らぬ程汚れ
 金貸しへ妻はしぶく蒲團出し
 蔵入りへ母座蒲團を出してやり
 座蒲團へ品よく坐る未亡人
 座蒲團をたぐんでからが長くなり
 客座蒲團を出せば去年の汚みが
 座蒲團を持つて説教聞かに行き
 座蒲團へ坐るさお店から電話
 座蒲團にきつちり坐る母寂し
 座蒲團の薄さも寄席の気分なり
 三番更また座蒲團はくすれてす
 座蒲團を足で引き寄せあぐらかき
 遠慮してあるへ座蒲團亦勧め
 お目見得は蒲團へお辭儀して歸り
 軒店の是で蒲團のつもりなり
 座蒲團を折つても一度世辭が入り
 お和尚さんが来た座蒲團のあはれ
 まだ温みある座蒲團をお茶子寄せ
 先輩の顔に座蒲團裏返へし

川柳 姫島支部句會 (大阪)

十一月八日 横田昭聲報

人氣、煙突、辯當
 人氣から人氣で来る旅役者
 阪妻の人氣子供がして廻る
 その人氣女優も来るさ云ふ噂
 すげらしい人氣を見てる懐手
 あの人氣女の行けるさこでなし

朝臣 同 冷笑 同 石竹

人氣出る程に反感高くなり

金よりも人氣大事な人ばかり
 あの人氣又一週間の日延なり
 あの人氣もうレコードになつて賣り
 賣出しの人氣に自轉車道を替へ
 人氣もう額の鼓が邪魔になり
 煙突へあれがそうや教へられ
 煙突の煙を社長案じてゐ
 煙突の煙今朝から風が吹き
 煙突がふいて植木が枯れか
 煙突の煙不愉快な都なり
 辯當のこゝで時間抄らす
 辯當を持たせて行かす母老いて
 辯當に一つし叱言を云ふ男
 辯當で一生俺は終るのか
 子を頭なで辯當つめさせる
 辯當をさげてハッ折よく通ひ
 手傳に來た家で辯當をすまし
 辯當はつめたし妻に先たれ
 山登り今日辯當はうまい事

川柳 螢ヶ池支部句會 (大阪)

安西杏三報

菊花香る好時節の十一月六日、久し振りの
 路郎先生を迎へ馬行、三笑、素人諸氏にも御
 足勢を願つて句會を開く。席上路郎先生の「
 動く句、動かぬ句」に就ての講話は獲る處多
 大であつた。

猫 (兼題)

捨てられる身をも知らず膝へ
 小間物屋仔猫一匹貰はされ

路郎 同 邦郎 同 村奉行

猫供養して三味線屋氣を濟まし

おすゝ猫尻目を使ひ使ひ來る
 隣の猫だ、ご罵じられ
 幸宅で或日旦那が猫を打ち
 猫からは生きればならぬ盗みなり
 猫の戀法華のやうな眠やかさ

女湯 (兼題)

男湯へ女房の聲もきこえて來
 子な呼んで石鹼渡す女風呂
 母さ湯に入るに恥かし年になり
 姑の目に嫁の目が長すぎる
 叱られて妻は手ぶらで長湯なり
 女湯の噂聞いてる畫下り
 女湯へ隣りの喋り來てゐる
 温まる暇もない程子に泣かれ
 子供丈着せて女房又つかれ
 女湯の嬰兒の聲をききわける
 畫靜か女風呂に居るらしい
 女湯へ三助はちこ堅くなり
 女湯を慌て、出れば四時が
 女湯は只姦しく夜になり

(佳吟)

兒を抱いて下女つれてゐる女湯へ
 女湯の小鳥の話損ばかり
 錢湯で嫁は瘦せさ言はれて來
 女湯の畫をいつもの髷で來る
 女湯でおまは姉さ同じこ
 女湯に出膳をいぢる男の子

椅子席 (兼題)

椅子席の二階見上げるれたまじさ
 芳花

馬行 同 鹿村 同 素人 同 月仙

踏切

三笑選

踏切へ今日泣くを背負て行き
 踏切にかゝつて窓へ顔を出し
 踏切をを越へて老母はほつさる
 踏切の車へ力借してやり
 踏切で遊ぶ子供をあふながり
 待つ間踏切番の世帯を見
 踏切で昨日逢た人を見る
 踏切へ近く汽笛のけたたまし
 (軸)酔ふてゐる目にも踏切光る
 踏切は大の首輪のしまるさこ

小波 金鐵子 憂土呂 川柳子 太公坊 加賀頭 知路柳 柳一路 三笑

月二會例会 (尼ヶ崎)

十月一日(前號の追加)

電話 (兼題) 杉原木三報

宿直に當なゝ見てる電話帳
 若旦那電話口からうれし
 婆さんはいらぬお世辭の多い事
 電話口いらぬお世辭の多い事
 電話室お前が出ればよかつたに
 久しぶり挨拶だけ一通話
 同窓の名を電話帳にふさ見つけ
 電話帳あすこもたしかあつた答
 電話かりに行けば嫌な息子が居
 電話口女房が居るさは云へず
 モシ／＼の多い電話は切れて居り
 電話口だん／＼大きな聲を出し
 待たされて居る電話口天井を見

吉朗 虚白 二源 薰 木三 吟女 同 二水 同

笑踊川柳會 (松江)

廿二日の夜あん馬居にて十月例会を開く。

兼題 廣告 梓樂大鳥居報

五選

藥の名廣告で知る程に病み
 廣告につられて東京へ東京へ
 兼題 美 伊藤まさる選
 見る物が皆美しい月に酔ひ
 美しく並んで舞の幕が下り
 兼題 恐怖 互選
 過ちのあこを淋しい乳が張り
 流言蜚語餘震の町へ夜がせまり
 兼題 汚 田中雪丸選
 手の垢が氣になる程に全快し
 (吟)畏まる足の汚れを叱る母
 兼題 娘 互選
 或る時は娘を持つた親の愚痴
 大それた娘に親の慈悲があり
 モデル嬢何んども云ねぬ肌を脱ぎ
 夜仕事の娘へ母はさんをつけ
 兼題 珍馬句に困んだもの米村あん馬選
 妻を呼ぶ朝を歡喜の陽が昇り
 夫婦づれ子を連れたのは振り返り
 來た客へ言辭をする新世帯
 (追)ホネムン宿の朝日へ立て鏡
 足跡 山本炎馬選
 足跡へ足跡つゞく雪の道
 足跡も轍も消れて積る雪
 足跡の點々雪路未だ遠し
 足跡の通りに凍へた月さなり
 戀猫の足跡縁に明らさま

雪丸 亂雪 鬼骨 雪丸 雪丸 夢一 夢一 夢一 貴久女

偶會 吟 (紀伊妙寺町)

中西香月報

墨

待つ手紙墨色を見て悟つて居
 ふるにける手元へ墨を磨つて出し
 候補者の墨根太きビラを見る
 墨すつて／＼夫を恨むなり

碧波樓 玉仙 香月 無心

漱下堂小集 (大阪)

十一月二日夜

陶山秀甫報

宴會がすめば圓タク止めてゐる
 年寄は圓タクに道を越へられず
 退院が圓タクで来て疲れてゐ
 圓タクでおくれた事を詫びてゐる
 田舎者圓タクで来て嬉しがり
 圓タクに汽車の時間を聞いて見る

鶴峯 二柳子 同 秀甫

月二會例会 (尼ヶ崎市)

十月十五日夜

於木三居同人報

女工 (兼題)

松耶選

もう一度女工になつて世帯染み
 メイデーに女工先頭つかまつり
 細帯の色さり／＼に女工街
 紡績へ純な女工で來たのだが
 錦紗着て女工は故郷の土をふみ
 女工には惜しいきりようであら
 ショウワインド女工四五人喋る
 新調へ女工嬉しい日が続き
 金送る女工みんないやがられ
 女工しても大阪に居たいなり
 作樂苦は知らず女工の母はゐに

白帆 如月 よし源 虚白 金令 吟女 同 三木 同



編輯室から

路 郎 生

▼三百六十五日日は決して短い日数ではないが雑誌を出したり、川柳の社會化のためにいろんな仕事をやつてゐるが實に夢のやうに早い。夜が、日が飛ぶやうに過ぎる。回顧すれば本年は從來よりも一層に惡戦苦闘は云ひながらよく闘つたと思つてゐる。私達の力の及ぶ限りのことをしたと思つてゐる。本誌もそれがために、うねねを抜きにしてみても一段さよくなつたことが知られる。多くの柳友の献身的努力が決して實を結ばないではおかぬことが知れる。来るべき昭和三年度のために一層の奮闘を祈つておく。

▼本月號は、なか／＼顔ぶれが揃つた。蛭子省二氏は病中でも相繼らず活躍されてゐる。例外

佛、岳紅佛は氏らしい筆である長野晴濱氏に漫詩「少しやあ考へるよ」を貰つた。川柳と一脈の血が流れ合つてゐるものである味つていただきたい。森田一二氏も顔を出して呉れた。富士野鞍馬氏は輕い旅行記を續けて呉れてゐるし、楳元紋文氏も久振りに筆を擧げてくれた。その外の諸君もそれぞれの人らしいものを書いて、潑刺とした力を見せてくれた。それがだめに紙數が足りなくて次號に廻はしたものが多し。表紙「上海所見」は若本素人氏が上海に於ける收穫である「萬よし帖」に描いた戯畫から採る。

▼白井梅里君の幹旋で新に豐橋支部が生れた。幹事は高橋綠郎君である。堅實な發展を期待して居る。▼天満支部の幹事原史風君が神經衰弱のため永らく休養してゐたので支部として實際の事務を北山悟郎君が引受けてやつてゐたが十一月に史風君が幹事を退いて悟郎君がこれに代るこゝになつた。尤も史風君の病氣はすつこい、方なので今後作句に精進しますと云つてゐる▼新に特別社友として若本素人松盛琴人の兩君を迎えるこゝになつた。素人君は曩に「龍げな柳珍堂の印象」を書き、最近「鳴り皮」を執筆して雜文欄に氣を吐いてゐる新人、琴人君は素人君の義弟で曾ては俳句に遊んだ人。

▼次に新に推薦賛同を得た賛助員と客員の方々を御紹介いたしておきます。

賛助員 五高教授 田中 辰二氏
客員 東京 川上三太郎氏
大連 大島 濤明氏
同 六日の螢ヶ池支部句會に久振りに出席した。若い人の熱心な集りである「動く句、動かぬ句」その他に就いて話した。兼題の披露が濟んでから、時間が餘つたので、支部會員の質問に應じるこゝにした。その熱のなみくでないので嬉れしく思つた

支部の會員外に馬行、三笑、素人の諸君も出席した。(句報參照)▼天満支部は十一日に大和路吟行を催した。(句報參照)▼糸屋町支部は廿日に東山吟行を舉行した。近來糸屋町支部の跳躍は目覺ましい。個人的に云へば飯山君は談山神社へ▼二柳子君は清石八幡へ私と私の家族は長崎博士から招待されて、廿日の日曜に一王山十善寺の觀楓に出かけて一日の清遊をこゝろみた▼私は仕事の關係で京都へ出かけた。名古屋から岐阜方面へ出かけた。名古屋では森田一二氏に大變迷惑をかけた。あるつ違つても森田氏と話してゐる愉快である。十九日小酒井博士を訪れた。こゝろよく柳談をされたことを嬉れしく思ふ。十六日に岐阜へ一寸立寄つた。よこの社を訪ねた。藤田雨音君に僅か廿分間ほど話して歸つた。▲山口縣の郷里へ行かれた井上信子女士が十日ごろに來訪されるとの通信に接したので待つてゐたが遂に見えなかつた。

▼舊同人の吉川啞人君が郷里山口縣久賀町へ歸住することになつたのでその送別句會を十七日の夜端の坊で開催したが頗ぶる

盛會だつた。▼「きやり」の編輯
なされてゐた、東京の塚越迷亭
氏が大阪に來住されることにな
つた。十七日の啞人送別會に
出席された。▼朝鮮の進藤二葉
里氏の令息が亡くなられた。お
悼み申し上げます。

▼三好幸郎君が近來強度の神經
衰弱に罹つて、八尾の両親のも
で静養を續けてゐる。九日に
池田を訪れて不在だつたので、
翌十日霞乃と共に八尾へ見舞に
出かけた。「われ太陽を蹴飛ば
さん」の元氣さを早く見せて欲
しいと祈つてゐる▼八日に柴谷
柴丹氏が阪神の電車事故のため
に負傷した。小生見舞に出かけ
るつもりで社へ電話したところ
が柴谷君が電話に出てくれたの
で驚きながらも「やれ、やれ」安心
した。その状態につれては柴谷
君の次の書簡によつてあきらか
である。

◇ 嗚呼傷をおさへた時の心持
負傷者の中に我名も並で居
今朝先づ毎日を見ました。名も
少し變へて有つたのでやれ／＼
と思つて次に朝日を見て少々ま
ごつきました。するうちに電報
が来るやら近隣の人が見舞つて

呉れるやら大阪へ逃げて出るこ
皆から社の方へ電話で聞て呉れ

ふ程同じ事を答へねばならない
のです。大兄からも御親切に難



ます。此の申辭を印刷して等思

有う御座いました御禮申ます。

眞に嬉しく思ひました。
(路郎曰く、こゝに漫画が挿入さ
れてあります)
閉門をくらすつた様に萬猪膏
昭和二年十一月九日 紫舟生
路郎大兄座下

移轉改號

▼食滿南北氏 大阪市西長堀南
通二丁目へ安川久流幸氏金澤
市味噌藏町真町四二へ塚崎松
郎氏 大阪市東淀川區中津濱通
二丁目七七番地改稱▼塚越迷
亭氏 大阪市西區船町讀賣新聞
大阪支局へ轉勤▼阿波泊水氏大
阪市東區區森小路南町一三七
へ藤堂柳子氏は木村童翁氏は
辭夢氏は吉丁と▼木村童翁氏は
晃卓と▼奥五一氏は鯉友と改號

正誤

▼前號二二頁上段九行目の江戸
へ稿出は横出、下段五行目の上
守下の業は上中、三〇頁下段二
十行目の積が着いたは其積、下
段二十一行目の今日三百七年は
今日から、三一頁中段一行目の
澤寛は澤庵、三二頁上段七行目
の佛公は佛心、三七頁中段十三
行目の蒙古は蒙求と訂正
近作柳樹の句「瓦斯タシク見る
程妙な杞憂にて」光哉、川柳塔
の句、「通夜の朝あんまり空が
高過ぎて」杏三と訂正。

投稿規定

- ▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記する。
- ▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』に封筒に朱記する。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼各地會報は清記の。
- ▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の。

募集

第五卷第二號課題

十二月五日締切
(各題二十句以内)

- 父 篠原 春 雨選
- 素人 相元 紋 太選
- 定宿 福田山 朝陽 共選

第五卷第三號課題

一月五日締切
(各題二十句以内)

- 三味線 前田 雀 郎選
- 代筆 矢田 右大臣選
- 借家 佐々木 三福 共選

每號募集

- ▼近作柳樽(舟句迄) 麻生 路郎選
- ▼古句質疑(三句迄) 蛭子 省二撥當
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件はト記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價定

一部 參拾錢
六部 壹圓六拾錢
十二部 參圓
(共稅郵)

料告廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼詩代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年十一月廿五日印刷

昭和二年十二月一日發行

第四卷第十二號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
發行所 川柳雜誌社
大阪府西成區千本通五丁目七番地
大阪府西成區千本通五丁目七番地
振替大阪三五一四番

大阪市港區八條通二丁目十二番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

店書湖寶

(大阪) 大寶棚 サクラヤ書房 其他市内各書店
(東京) 仲見世 玉森堂 (神戸) 米田 後藤 (函館) 石塚
(廣島) 新天地 山口 (石川) 縣小松 マコト屋 (京都) 畫萬堂

川柳雜誌社關係の人々

(ろは順)

贊助員

池澤樂居 大弘雄 岡本一平 片岡直純 嘉納純二 田中辰涯 長崎柳秀 野草省三 藤枝史郎 藤本卯之助

客

小酒井不木 赤井清司 末弘嚴太郎 伊藤藤彦 今井井造 西原井木 大島柳雨 岡田三郎 川上三太郎 川村花菱 吉岡鳥菱 吉田笠山 武笠山椒

特別社員

安川久流美 前田雀重 小田半文 木村柴舟 柴谷春雨 篠原省二 森子東魚 別社友 岩崎柳路 岩本素人 西原史一 本柳一郎

徳田柳陽 尾川相馬 河合舟々 龜井放馬 横田眠聲 高橋緑郎 高橋かほ 津見柳骨 辻内耕馬 奈中左馬 桑島文仙 矢田右大臣

柳川馬 安井助 松本ひろ 松盛琴 安西琴 西野悟 北山三郎 比賀萬代 橋本千代 橋本二柳 藤生里藤 麻生飯乃 喜田乃 三好乃 麻生乃 主幹 編輯局(特別社員)

大阪市南區茨橋南詰

萬よし

大阪市住吉區安立町五丁目

柳

大阪市西淀川區姫島町五二一

聲

道頓堀支部 幹事 庄

住吉支部 幹事 徳田 双柳

姫島支部 幹事 横田 眠聲

天満支部 幹事 北山 悟郎

仁川支部 幹事 矢田 右大臣

金澤支部 幹事 比賀 壽三

大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七

松江支部 幹事 奈瓦 井仙坊

金澤支部 幹事 比賀 壽三

神戸湊町一丁目電氣局西

岡山支部 幹事 津田 耕水

糸屋町支部 幹事 川合 舟々

山口縣山口町石原小路

石川縣輪島町鳳至上町ル

田邊支部 幹事 辻 左馬

山口支部 幹事 柳川 洲馬

輪島支部 幹事 桑島 文絲

島根縣鏡川郡高松村

東京市芝愛宕町一ノ六大成社内

小松支部 幹事 本田 柳一路

高知支部 幹事 中澤 濁水

東京支部 幹事 岩崎 柳路

高知支部 幹事 中澤 濁水

豐橋支部 幹事 旭町 高橋 綠郎

函館支部 幹事 龜井 花童子

高知支部 幹事 中澤 濁水

豐橋支部 幹事 旭町 高橋 綠郎

讀書子に告、

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こゝうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にさつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

古書目録

が出来ました。御入用の方に送呈します。

「川柳雜誌」で見たと御書き添へ御請求を願ひます。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

滿洲へ積む白鶴の樽の數
白鶴を飲む同朋がなつかしい

臺所に白鶴据ゐて春を待ち



灘 津 攝

嘉納合名社會釀

川上三太郎編

四六判
四百頁

定價壹圓五拾錢

金郵
拾送
錢料

五八

新川柳壹萬句集

編者川上三太郎氏は現代川柳界の最大權威として名人の稱ある人。その編むところの本句集は新川柳中興以來昭和に至る二十餘年間、日本内地は元より北海道、樺太、臺灣、朝鮮、滿州、支那、南洋の遠きに至る各地より蒐集、嚴選したもので、大別して「人の一生」「人の生活」「時は流れる」「朝から夜中まで」「地にあるもの」の五部とし更にこれを類題別としたる如き全く川柳歳時記の觀あり。初心者にとりては最もよき指南書であると共に、讀書人にとりても亦興味深き、世界に於てたゞ日本のみが有する最も短かき人生の深刻なる記録である。

法學博士
三面子

岡田朝太郎著

寛政改革と柳樽の改版

四六判布裝
四百頁
定價貳圓五拾錢
送料拾八錢

同

隨筆

虛心觀

四六判布裝
四百七十二頁
定價貳圓參拾錢
送料拾八錢

松村範三著
川柳日本俗說史

三六新製布裝
四百八十六頁
定價金貳圓
送料拾貳錢

磯部甲陽堂

東京日本橋區東區
東區橋本區
六五〇五番地

發行所

古本屋漁りの興味こ！

古本屋そのもの、面白味を知りたい人は「古本屋」をお読み下さい

古本屋

年五回發行

實費にて頒布

一號賣切二號三號少數

殘本あり

珍書や絶版書をおさびしになりたい人や古本の價值を知らうとなさる人は「古本屋」をお読み下さい

「古本屋」發行所 荒木伊兵衛書店

大阪市西區江戸堀南通り三丁目

電話土佐堀一四六一番

振替大阪一二八五六番

貝印

内外



レコード

冬のまどゐ

拾二月新譜

浪花節 義士兩國勢揃(二枚) 吉田 一若
同 魚屋 本多(二枚) 壽々木 米若
同 義士 小田小左衛門(二枚) 同
同 油なめ慾の婿入(二枚) 岡本 鶴丸
同 吉原 葉平獄門 重兵衛(二枚) 末廣亭小辰丸
同 血煙 樂平獄門 殺し(二枚) 上田 五萬樂
映 畫 お富さ興三郎(二枚) 田中傳四郎一派
浪花節 義太夫紙 治 豊竹 團司
薩摩琵琶 羅 生 門 羅水 福澤錦淺
滑稽諷刺 月が鳴いたか 内外演藝團
獨 唱 庭の千草 團 春 枝
ホー・ム・ス・井・ト・ホー・ム 伴 泰 太田繁雄
シロホン合 演 シロホン荒川 倉藏
小唄 ぜかれく 演 ヴァイオリン 永野 芳三郎
吉 野 山 コル ネット 阿部 善三郎
三 味 線 立花家梅之助

書生節 危い節、流れ星 鈴木 白洋
筆シロホン 合 奏 梅にも春、御所車 筆 渡邊金峰
シロホン 荒川倉藏
ヴァイオ 独奏 秋 色 種 ミツチエール
ウエツクスラー
和洋合奏 松の緑 A、K、管絃樂團
軒屋、望月社中
山田流 六 段 調 同 筆 落合 康惠
落合 元惠
筆 曲 菊 水(二枚) 同 筆 落合 康惠
落合 元惠
巡禮節 西國第二番 森山 痴閑師
俚 謠 おけさ節 和 田 如 月
三味線 佐藤觀旭
端唄 二上り新内、博多節 新 町 小 今
喜 藏 三味線 小 今
同 我 戀、癡なぐら 山 村 豊子

阪神沿線今津町

合資 會社

内外蓄音器商會

川柳雜誌

(第四十七號)

定價金三十拾錢

—(呈送報月錄目)—

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二年十一月二十五日印刷 昭和二年十二月一日發行